鉄くずバベルの塔

朝昼夜

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
鉄くずバベルの塔

【Ｎコード】
Ｎ２２６２Ｎ

【作者名】
朝昼夜

【あらすじ】
今にして思えば、ということだが。
あの時、安泰だった私たちの家系、というか親族に、たしかにその不穏な気配は近づいていた。
と言っても、『不穏な気配』というくらいなのだから実体のある存在ではなく、あやふやな存在なのであるが、確かにそれは、無色透明であっただけで、我々の間近で密かに息づいていた。…というのが昔、親戚の中で一時期そればかりが噂になったことがあった。
まるでそうやって噂すること自体が呪いであるように、その無色

透明な存在に関する噂は絶えることが無かったのだ。

ウーパールーパー。鉄くずバベルの塔。香田。口裂け少年。久国。

そういったものが登場するお話です。

1

今にして思えば、ということだが。
あの時、安泰だった私たちの家系、というか親族に、たしかにその不穏な気配は近づいていた。
と言っても、『不穏な気配』というくらいなのだから実体のある存在ではなく、あやふやな存在なのであるが、確かにそれは、無色透明であっただけで、我々の間近で密かに息づいていた。…というのが昔、親戚の中で一時期そればかりが噂になったことがあった。
まるでそうやって噂すること自体が呪いであるように、その無色透明な存在に関する噂は絶えることが無かったのだ。
無職透明な存在。違う。無色透明な存在。
さて、無色透明であるにも関わらず、何故、親族皆一同がその存在を認知出来たかというと、それはそう、鼻に纏わり付く、臭いのせいである。
もう一度繰り返すと、臭いである。
不思議なことであるが、親族の中でその臭いを嗅がない者は誰一人としていなかった。ちなみに私の家庭で始めに気が付いたのは普段臭いに鈍感な父だ。
「なんかくせっ」
何の脈絡も無く、テレビを見ていた途中に突然口走ったのであるからして、みんなキョトンと目を丸くしたものだが、しかし彼の顔はめっちゃひん曲がっているのだった。そんなにひん曲がる顔だったのかあなたの顔は、って突っ込みたくなるような曲折。実際、兄は突っ込みをしたかったのだろう、今にも何か口を出しそうだったのだが、しかし何と言う伝染力であろうか、彼の顔も突っ込みを入れる前にひどいあり様に変わって曲折、まるで人ならざる者のその顔に、母が突っ込みをしようとした瞬間に彼女の顔もひん曲がってしまったのである。

そこで私は、突っ込みを入れようとすると顔が曲折するのか、と気が付いたのだがそれは勘違いで私の顔も結局すごくひん曲がった。

「くっせえ」

「くせえ」

「くっせえええ」

家の家庭には犬がいるのだがその犬に至っては顔がひん曲がるということは無かったが、これは後々気がついたことなのだが、犬は一瞬で臭いに耐え切れなくなって気絶していたから顔を曲折させている場合では無かったのだ。

鼻が曲がった人間たちは家中をのた打ち回り、苦しみながら臭いから逃れようと逃げ場を探し回り、結局全員がトイレに集まった。トイレは今にも破裂寸前なほどの密集である。そもそもトイレは元々トイレなのだから臭いわけ。みんな涙目である。だが、そこしか逃げ場が無かった。犬は気絶してしまったから後で誰かが助けに向かった。今となってはそれが誰だったのかも覚えていないのだが。

夏のなんてことない一日がとんだ大惨事であって、しかもその臭いの原因を全員がマスクを付けて一日中捜索したにも関わらず家は臭いまま。

暑くて臭い。しかも飼い犬は気絶。最悪の夏の思い出である。

で、その悪条件な環境で夜を過ごした家庭というものが私たちの一家だけではなかったことから、この臭いに対する謎は深まりをみせることに変わっていくわけであるが、ご近所さんにも臭いが来たとかなら下水の関係ですかなという疑いが生まれるが、臭いを感じたのが親戚一同全員だったということで明らかに事件の臭いである。マジ怪しいと言って噂になって当然である。

親戚皆一同その日から臭いに対するストレスが半端ないことになったので、陰ながら私たちの親戚皆一同は『臭い親族』という屈辱的な評を与えられることになったのでマジ怒りが抑えられんって話である。みんな心内で『臭い親族』という評価を呪い、そしてそれ以上にその突然現れた無色透明な臭いを皆で口々に呪った。ハッキ

リ言って鼻呼吸が不可能ないくらいに臭いのであって、みんな口呼吸で生活するという有様に陥ったのだから本当ストレスが半端ない。そのせいでみんな大変毎日が困難なハメになってしまったのだが、しかし逆境に強い人々であったらしく、皆、懸命に学問にお仕事に努力を欠かさなかったのであった。しかし、あの時私は臭いにやられてしまった愚か者だった。

残念ながら頭がいかれポンチで満たされた。

どういかれたかと言うと、ある日突然、私は『物書きになりたい』とそこら中に口走る軽薄者になってしまった。なんということであろうか、物書きなどという実る可能性の低い職業を志そうと考えてしまう愚かで夢見がちな人物になってしまった。後々に聞くとその時の私は決まって心ここにあらずと言った表情をしていたらしく、さも本当に夢を見ているようだったのだと言う。今にして思えば、私は本当に夢を見ていたのではないかと感じることもあるのだが、ハッキリ言って物書きになりたいなどという考えは、そんなもんただの現実逃避である。だが、言い訳をすると、現実逃避もしたくなる夏の日を過ごしていたのだから物書きになりたいと発狂するのも当然だった。

鼻呼吸だったのである。普通に鼻呼吸で生きていたしこれからもそうしたいのに、突然それが臭いのあまりの臭さに妨げられるハメである。

夏で猛暑でただでさえイライラするのに臭いがたまんないほど悪臭で鼻呼吸が妨げられて口呼吸をするしか術が無くなる。家の中で無理矢理口呼吸なのでちっとも落ち着かず、普段、無意識下で行っている呼吸が意識しないと全然上手くいかないという苦痛は生半可なものじゃありませんよ、はっきりいって、とか言っている間にも呼吸が上手く出来なかったりしてイライラが募る。しかも物書きになりたいとホラ吹きをしまくったおかげで、見栄を張って作品作りに励んでいる風をしなくてはならんので、家の中のワープロから足を一時たりとも離すことが出来ないので外出も出来ない。家から外

出すれば臭いからは逃れることが出来て鼻呼吸だとか口呼吸だとか考え込まずに呼吸できるようになるはずだというのに何ということでしょう。物書きになりたいと言う現実逃避のおかげで家から離れることが出来ない。ワープロに夏の蒸し暑い中一日中ｰり付くという馬鹿なことしか出来ない。しかもそれで何か書ければ見栄も本物に変わるので良いが、書こうと思っても指が動かず何か閃きそうになったとしてもそういう時に限って鼻呼吸をうっかりしてしまって「くっせえええ」と絶叫して次の瞬間には何を考えていたのか綺麗サッパリ忘れる。

一行も進まず、永遠にワープロは真っ白な画面であって苦悩。苦渋。臭い。絶叫。苦悩。苦渋。臭い。

――くっせえええ……

そんな間にも家族の誰かが臭いの犠牲になっていく。

風一つ無い、ひたすらに蒸し暑い夏の日だった。

入道雲や、風鈴の音。

それから数日経って、臭いは無くなるどころか益々その悪臭力を増していて、しかも親族皆一家残らずその状況は変わらないということなのだから、やはり『不穏な気配』は間違いなく親族の間で漂っている。その正体は、その根源は、その原因は何なのか。臭いの原因は…。

誰かの陰謀か、はたまた心霊現象なのか、それとももっと魑魅魍魎な何かが原因なのか…誰も彼もが臭いの原因を知りたがり、調査を怠らなかったが、下水には問題なかったし周辺に悪臭の原因となる何かがあるわけでもなかった。そもそも親族は全員が同じ地区に住んでいるわけではないのだから、土地などが原因であるはずも無いのだ。

そういうわけで、皆は口呼吸がどんどん得意になるばかりで、そ

れ以外のことは臭いで体力が奪われているので不得手に陥るばかりだった。口呼吸が得意になっても、周囲に馬鹿にされるだけであり、ハッキリ言って邪魔な特技である。無意味な特技である。

親族一同は衰弱を強め、早く臭いもしくは『不穏な気配』の正体を暴かねば、衰弱のあまり一族の絶滅もあり得た。そんな危機的な夏の中。

私はさらに発狂を深めていて物書きとホラ吹くことは無くなったが、ギター奏者になると言い出したので皆、涙目だった。物書きもギター奏者も周囲からすれば不安定という意味では対して変わらなかった。私自身は何がキッカケでギター奏者になりたいと思ったのかさえも、もう覚えていない。だから家族も当然、なぜそのような思考回路になるのか理解が出来ず、困惑を深めて口呼吸を忘れて臭いを吸ってしまい辛い思いをするばかりだった。

さらに深刻なことには、逆境に強い我々親族であったはずだが、私のほかにも突飛なことを言い出す者が現れた。

それは親族の中で一番幼い吾郎君である。吾郎君は元々力強い男であったものだが、やはり口呼吸の困難に敗れてしまったのだろう、

「俺、ウーパールーパーになるよ」

と言い出したということを人づてに聞いて私も絶句した。職業なんていうレベルではなく生物の枠を飛び越えたいという願望を騒ぎ出したというのであるから、親族一同暗雲がさらに立ち込めてきたという絶望を感じることを妨げられず、もうみんな暗い顔をしながら口呼吸をするのが常になった。

そこでふと思い出したのが私の友人にウーパールーパーを長年育てていた輩がいたということで、練習もろくにしてないのにギター奏者になりたいと脈絡も無く言い出すほどに元々が発狂していた私は、今にして思えば何故そういう行動に出たのかマジ理解不能だが、安かったので買ったギターを珍しく放り投げ、そのウーパールーパーを育てていた友人の元へと急いだのであった。たしか記憶によれば、かなり急いでいた。五十メートル走を走る時の勢いで急いでい

たということを、やけに覚えているが、なんでそんなどうでも良いことばかり覚えているのだろうかいまだにわからない。
ていうかウーパールーパーを育てている友人の所へ言ってどうするつもりだったのかマジいまだに理解が出来ない。
おそらく、それもこれも『不穏な気配』のせい。もしくは、恐ろしい悪臭のせいだ。
入道雲や、風鈴の音。

2

友人は謎な性格をしている人間で、自宅の庭で何かモノを作るのが趣味の人だ。庭でモノを作るなんてのは別に謎ではなく、ごく通常の行為なのかもしれないが、その友人の場合は、製作するモノが異常なので通常でないのだった。

で、走り続けて息を切らしながら辿り着いた、久しぶりに訪れる友人宅。

見た瞬間に驚愕。

なんということか、庭に足を踏み入れることがまず困難だった。つうのは、庭に積み重なっているモノが邪魔で進入が不可能なのである。鉄である。鉄くずの集合体である。鉄しかない。それを私は足で蹴飛ばすが、硬いそれはビクとも動かない。

「めんどくせー」

ぐだぐだ言いながらも、ある意味『山』と言ってもいいその積み重なりを、私は懸命に汗水たらしてよじ登ることにした。試練だと思えばこんなの何てこと無い障害だ、とか思いながら。

陽の光の熱を吸収しているその鉄の積み重なりは、下手に触ると火傷するくらいだったので、慎重に運動神経をフルに活用してよじ登ったものだ。

そして私は十分くらい時間をかけた。めっちゃ暑い中、しんどいと何度も思いながら。しかし遂にその『山』を登り切りそうになった時。

突然、頭上から振り落ちてきた影。鉄パイプが一本、崩れ落ちてきたのだ。

慌てて避け、そして避けることに成功するが、しかしその際足を滑らせてしまう。

「うぉぁあああ」

と叫びながら絶望の心持ちに支配された瞬間、しかし、救世主。
ギュッと、手を掴まれた。
その手はボロボロで黒ずんでいる軍手。私はそれを見て安堵の息を付いた。そう、つまり、友人の差し出された手のおかげで、私は落下せずに済み、傷一つ付くことも無く、助かったのだった。
「熱っい鉄を素手でよじ登ってくるとは。…本当に、ご苦労さまだったね！」
優しい言葉で労わってくれる『変人』として有名な友人が、長い黒髪をはためかしながらニッと微笑んだ。
太陽を背負い込んだまま。

「お、めずらし」
山の頂上をガチャガチャと音を鳴らしながら歩いていると、坊主頭のもう一人の友人から声を掛けられた。彼がいるとは思っていなかったので少し驚きつつも、
「お。元気？」
などと軽い挨拶をしながら、この鉄くずの『山』が一体どういう試みで作られたのか尋ねようと思った。だが、その前に長い黒髪の友人、香田は、黒ずんでいる軍手を手から抜き取り、私がいろいろと尋ねる前に全部説明しようとしているのだろう、思案している雰囲気だった。
「うーん、これがどういう製作物かということをしっかり説明したいんだけど、どこから話したらいいか…。難しいな。……ねえ。……久国！」
彼女は坊主頭のスポーツマン青年、久国に叫んで手招きをする。
「んあああー」
だが久国は気だるそうな怠け者の声。彼は、おそらく猛暑のせいだろう、うなだれているばかりで、腰を上げようとせず、しかし家庭用ビニールプールに水着一丁でぷかぷか浮かんで楽そうでもある

のだが、「…だるい」などとうわ言ばかり。
「うぐぐぐぐぐ」
久国が良い反応をしないことに香田は歯を剥き出しにして怒りを表しながら、作業服姿のまま腕を組み「う～ん」と唸る。そんな風に悩む彼女を見ながら私は、
「別に無理して考え込まなくてもいいけど。どうせろくな理由で作ってないんだろ、これ」
と、呆れたため息を付きながら、『山』を歩き、ウーパールーパーの水槽がどっかに転がってないかなあと目配せするのだった。その時私はウーパールーパーのことで頭がいっぱいだった。
だから『山』の製作理由など正直私はどうでも良かったのだが、しかし彼女は手をパンと叩き、「そうだ！」と目を輝かすのだった。
そして、
「バベルの塔って知ってる？」
と切り出し、そこからしばらく、楽しげな彼女の演説は続くこととなる。

バベルの塔と言えば。
神話が頭にパッと浮かんでくる。だが、それだけだ。特に知識は無い。
そんなもん知っててもどうでもいいと思っている私は祈りが足りない愚か者であるが、香田はぺらぺらとバベルの塔について淀みなく演説。
「バベルの塔ってのは旧約聖書の創世記１１章にあらわれる伝説のお話の中の建造物ね。よく語られるバベルの塔のお話だと、塔は崩されたということがよく言われるんだけど、創世記の記述の中では塔が崩されたなんていう記述は無いのは知っておいてね。そもそもバベルの塔は何の為のお話かというと、世界には何故言語が様々あるのか、ということを説明する為のお話なのね。バベルの塔のお話

によれば、昔々は人々は一つの同じ言葉を使って話をしていたらしいのだけれど、それがゆえに結束が強かったらしいんだよね。それゆえに力が強大だった。…そんな彼らの結束の強さを恐れた神様は、どのようにすれば人間たちの結束は弱まるのだろうかと考えて、そうか、人間どもがお互い言葉を通じ合わないようにしてしまえばいいのかと思い付いたんだって。人間たちはバベルという町で、有名になるために、天にまで届くとっても高くて大きな塔を作っていたんだけど、神様が言葉をバラバラにしてしまったせいで言語によって人々は統制されなくなってしまった。それによって人間たちはお互いの意思疎通が図れなくなってしまって、何時しかバベルの町を発展させることも、高くて大きな塔を作ることも止めてしまった。みんな各地に散らばっていっちゃって、そういう経緯があって、今の言語がバラバラな世界は生まれたの。とっても面白い話だよね」

熱弁だった。そこまでほとんど一息で彼女は言ってのけた。香田は額にいくつも浮かんでいる汗を「ふぅ」と言いながら作業服の裾で拭き取り、「いやあ日本語っていいね」などと笑っているので楽しそうである。

よくもまあ猛暑にも負けずペラペラ喋るものだ、と思いながら私はウーパールーパーを見つけられないのでがっかりする。そのがっかりした思いでビニールプールでくつろいでいる久国のだらけた顔を見ているとムカムカしてくるってなもんで、大きくなったウーパールーパーのようにお前もふやけて巨大化して破裂しちまえ、という悪態を心の中で呟いたりしていた。

久国はしかしだらけながらも香田の演説を聞いていたらしく、青空を目を細めて見つめながら、

「ていうかそれ全部、ウィキペディアからの引用じゃん」

と皮肉めいた言い方をしてから卑屈な笑い声を上げて、しかしやっぱりだらだら怠けるのだった。

そんな久国を眺めているとビニールプールはそんなに気持ち良い

か？と問いただしたい気持ちに駆られてしまうので、もう彼のことを見るのは止めてウーパールーパー捜索を再開した。
鉄くずの『山』を歩いていると、意外と丁寧に鉄くずが組み立てられていることに気が付く。それが太陽に向かって積み上げられている。そんな『山』をしばし歩いていると、ああ、香田は鉄でバベルの塔を作っているのか、ということをようやく理解できた。ウーパールーパーに気を取られ過ぎている私は、そんなことにも気が付くことが出来ていなかった。
「さて、鉄を組むぞぉ！」
意気揚々。そんな言葉が似合うほどにテンションが高い香田は、鉄パイプを投げたり突き刺したりしている。楽しそうだな、と思ったが私はとにかくウーパールーパーのことしか興味が無い。久国はビニールプールにしか興味が無い。香田は鉄くずでバベルの塔を作ることにしか興味が無い。
神様が手を下さなくても私たちは自然と何処かへ散らばっていくんだろうなあ。そんなことを思いながら太陽を見上げていた。太陽の手前に、真っ黒な影が。
あれは何だろう、と不思議に思うのは一瞬だけのことで、私はすぐに『山』を歩いてウーパールーパー捜索を再開する。
香田に水槽の場所を聞けばアッという間に見つかるという答えには、なぜか行き着かない愚か者の私は額に浮き出る汚い汗を流しながら必死だった。

3

夕焼けが街を覆う時間帯になってもウーパールーパーを見つけることが出来なかった。私は悲しくなりながらもギターを弾きたい思いに駆られたので、香田と久国に別れを告げて鉄くずの『山』を降りていった。陽が傾いているおかげで、帰りの鉄は熱くないのが、やけにありがたかった。

香田家の庭を背にして街の歩道。疲労のあまりにしんどかったが、しかし私は何故だろうかそれでも走っていたのだった。急いで走っていて五十メートル走の勢いである。おそらく、ギターを早く弾きたかったのだろう。

「いてっ」

だが、その途中で石につまずいて転んでしまった。くやしくなっていると前方から声。

「…痛そー」

子供だった。どことなく久国に似ている坊主頭。日焼けでこんがりの浅黒い肌だ。

「みてんなよ」

土埃を払いながら子供に因縁をつける目つきをしてみると子供は脅えたらしく「うひっ」などと喚いて飛び上がったが、しかしその飛び上がりはどこかぎこちなく、わざとらしかった。子供は私のにらみにちっとも脅えていないのだろうかと疑い、もう一回「みてんなよ」と今度は鷲のように鋭い目つきをしてみたところ、彼は今度も同じようにどこかぎこちなく、わざとらしい飛び上がりをするのだった。そして、

「うひひひひ」

とこちらを嘲笑うような卑屈な笑い方をするので、悔しくなった。

「……」

元々、足が疲労困憊で気だるい。ギターを弾くこと以外のことで

エネルギーを無駄に消費したくなかった。だから子供を突き飛ばした。軽く小突く程度でどかしたろ、という魂胆。
そして私は手の平を前に押し出し、少年のちっこい体にそれをぶつけた。右肩あたり。
その時に、あれ、と思った。
子供で未発達と言えど肩には骨が入っているのだからある程度は硬いはずなのに、まるで彼の体は水しか入っていないようにタプンタプンというか、ぐにゃぐにゃな感じだった。気のせいかな、とも思ったけれど、しかし子供が卑屈な微笑みを絶やさないのを見て、『あ、こいつ』とものすごく嫌味な表情だと気が付いた。そして、もう一度、今度は左肩のほうに手の平を突き出したのである。
しかし、やはりと言うべきか。子供は左肩でさえも水しか入っていないようなぐにゃぐにゃだった。
しばらく私は彼と向かい合った。人間の体の七割は水でなんちゃらかんちゃらという話は聞いたことがあるが、この子供は身体の十割が水なんじゃねえだろうか、って思った。
私が呆然としている間中、彼はずっとにやにやと余裕で、どっちが年上なのかわかったものじゃないのが悔しい。そんな少年は卑屈な微笑みはやはり絶やさないままに、
「僕ってさ。家庭用のビニールプールで身体が作られてるんだって」
と、言った。そしてその後。少年に大きな変化が起きたのだった。
これはいまだに覚えているのだが、怪談話に出てくる妖怪が現実に浮かび上がってきたという錯覚をしたもので、何故かと言えば彼の口が全力で裂けたからである。
口が裂けたことによって剥き出しにされた歯茎はやけに腫れていて、出血だらけだった。しかも歯はお歯黒みたいな感じで全て漆黒で塗られている。裂ける音が生々しいのが記憶にやけに残っていて、ベキベキという肉が裂けるような音だった。
その音を耳に残しながら、夕焼けに向かって全速力で逃げ出した。
口裂け少年は追ってはこなかった。

無事に帰宅した頃には陽も沈んでいたので直ぐに飯を食った。その日は口呼吸による疲労のピークがみんなに訪れていたせいか、家族一同、一人として言葉を発する者はおらず、犬などに至っては気が狂ったように室内を走り回っている。飯の内容だってご飯と味噌汁とお新香と納豆というシンプルで構成されており、とにかくさっさと飯も済ませて風呂も入って眠りに落ちたいという雰囲気の一夜だった。臭いはやはり止まる所を知らぬほどに悪臭で、相変わらず原因を突き止めることは出来ていないので口呼吸で耐えるしか術はない。

「ああ気だるいなあ」と誰かが言う。

「眠いなあ」と誰かが言う。

「テレビ見て寝よっ」と誰かが言う。

「ふーろはーいろっ」と誰かが言う。

その時は疲れていたので、誰がどの言葉を言ったかなんてまるで覚えていない。

だが、兄が寝る寸前に言った、

「俺はセロハンテープになりたい」

という言葉だけは、忘れるわけにもいかなかったが。みんな聞いていたが聞こえないふりをして、そのまま休憩へと行動を移す。

その後部屋に向かった私は、その夜ギターに熱中した後、ぐうぐう寝た。そして、夢を見る。

死んだ母方の祖父と父方の祖父が手を取り合い、天へと昇り行くのかと思いきや無言のままこちらに振り向くという実に奇妙奇天烈な夢。最後にその二人を口裂け少年がパクリと飲み込んだところで、夢は終って、目を覚ました。

目を覚ました時にはまだ夜中で、窓を見ると丁度三日月が空を翔けているところだった。
「……？」
その三日月の手前を、一瞬黒々とした何かが通過したような気がした。不思議ではあったが、錯覚だろうと思って布団にまた潜り込む。だが一度覚醒してしまったせいか、ちっとも眠気が襲って来ないので、仕方が無いのでギターを？き鳴らすことにする。ちゃかちゃかと、リズム。
途中から段々とテンションがあがってくる。こりゃ良い感じだぜ、ってことでちゃかちゃかとリズムをさらに激しくしていくうちに、鼻歌を口ずさもうとしてしまったのは間違いだった。
「くっせえええ！」
誤って鼻呼吸。こうして私は気絶して、結果的に、再び眠りに落ちた。
朝日が地球を照らし出す頃になると自然と目を覚まし、慣れたもので、鼻呼吸を一度もすることなく口呼吸だけで朝の支度をやってみせる。
みんなはもう出発していて家は静まり返っている。そんな中、家を出発。
その日は学校だった。
その時まだ、気がついていなかった。
兄が既に人間としての姿を変え、セロハンテープへと身を転じていることに。

学校へ行く途中に香田の鉄くずの山がどんなもんになっているのか気になったので、先日口裂け少年と出会った道とは違う場所を通って、彼女の庭へと訪れてみた。
しかしがっかりする。何の変化もなかったからだ。

昨日帰った時となんら変化の無い鉄の山が、堂々と空へと鋼鉄の身を伸ばしているだけだった。
ふと、その時ウーパールーパーのことが頭をよぎったが、しかし頭をブンブンと横に振ってそのことを忘却しようと試みた。だが、ウーパールーパーが湧き出てこようと脳みそん中で暴れ始めていたので、私の自我とウーパールーパーの邪念で対決だった。
「負けんぞっ」
「おらおらおらおら」
「負けんぞっ」
「おらおらおらおら」
「負けんぞっ」
「おらおらおらおら」
「負けた」
そういうわけで私はウーパールーパーのために、学校に遅刻することを覚悟の上で、鉄くずの山を登り始めた。
まだ陽が照っていないので鉄くずをよじ登ることは簡単だった。
二回目なので慣れてきたことも相俟って、三分くらいで山を登り切る。
すぐに探し始める。今度は山の向こう側へと下山して、その周辺を探索したりという、別の探し方も試みたりした。
それから一時間程は探していた。しかし、鉄くずの山の麓をごぞごぞとやっている時である。
正直、夢であって欲しかった。だが、試しに自分の顔面を殴ってみると痛い。夢ではない。
涙目になりながら、そこにある現実を直視して、そして喚いた。
鉄パイプが、生物を貫通しているのである。それは紛れも無く、ウーパールーパー。
私は随分と長い時間喚いたものだが、それは周辺に住んでいるであろう住人たちのことを一切考える余地も余裕も無い暴走であった。そのせいだろう、香田家から、まだ眠たげな様子の、目を擦ってい

る香田が現れてしまった。眠たげだが顔つきからは怒りが滲み溢れている。私はその時、『ウーパールーパーを殺したの俺だと勘違いされるんじゃないか』という疑問を頭で想像していた。そして、その嫌な想像は残念なことに現実のものとなった。

しばし私と香田は見合っていたものだが、彼女は怒りで頬を引きつらせているのだ。絶命しているウーパールーパーと私に交互に目配せしながら。

「お前が殺したんだ」

めっちゃ冷たい声音である。身体の至る所から冷や汗が吹き出て止まらなくなるのがわかる。早く逃げなければ自らの命が危ういということは明白だった。鉄パイプで自分の肉体が串刺しにされて『山』の天辺に旗印のごとく突き刺される映像がふとよぎる。

そんな映像を浮かべている間に、香田は周辺に落ちている中でもっとも縦に長い、六寸ほどはありそうな鉄パイプを握り締めた。彼女の二の腕からは血管が浮き出ている。それ程に香田は力強く鉄パイプを握り締めているのである。おそらく、私を撲殺あるいは旗印にするために。

「お前が殺したんだ」

よくよく見れば、目さえも血走っているではないか。元々モナリザ的な雰囲気を持ち合わせている香田なだけに、静かな殺意を滲ませている彼女は半端ないホラー。

「ご、ごかいだ」

情けない悲鳴を上げながら、しかし腰が抜けてて後ずさりしか出来ない。

「そもそも、俺がウーパールーパーを殺す理由がないじゃないか。俺は探してたんだぞ、昨日からずっと！」

「殺すために探していたんだろう！　だから今日殺した！」

「違うんだってもう死んでたんだって」

「うっせえ死ね」

お話にならない。もう彼女は私の目の前にまで迫っている。彼女

を見上げる。朝日を背負っているのは昨日と同じなのに、そこにある微笑みは先日とは間逆のそれだ。昨日の微笑みが女神のものだとするならば本日は魔王だ。魔王が現世に降臨したということだ。

諦めるしかないのかっ。

何故このようなことになってしまったのかと後悔を募らせてしまい、目頭が熱くなった。

ウーパールーパーを見つけたかっただけなのに。昨日一日中頑張って探しても見つからなかったのに。

それが今日遂に見つけ出したのに、死んでるなんて。

そして香田に殺されるだなんて。今こんなところで死ぬだなんて。

どうせなら、旗印にしてもらって、鉄くずバベルの塔の象徴にしてもらいたいものだな。

まあ、人間だからすぐ腐るけど。

無念だ。

最後にギターを弾きたかった。

ギター奏者に、なりたかった…。

すごく巧みな。

「さらばだ」

香田が鉄パイプを勢いよく振り上げ。

身体に、深々と突き刺さった。

4

夢オチの後の気持ちっていうのは不愉快だ。
胸の辺りに鉄パイプが突き刺さった感触が残っていて、すごく気持ちが悪い。
だけどまだ深夜だった。窓を見ると、三日月が空を翔けている。
夢で見た黒々とした物体は、今回は通過することもなく、ただぼんやりと三日月が窓の外にあった。
「ああ、しんど」
足が重たい。疲れが全然取れていない。まああんだけ歩き回ってからまだ一日も経過していないのだから当然なのだろうが。
夢の中でやったようにギターを?き鳴らすような気分にもならず、口呼吸をしながら、勉強でもしてみようかな、という思いに突然駆られた。そう思い立ち、始めはまあやらなくてもいいけどな、だるいし、という思いだったのだが、どんどん頭の中を勉強が支配して行き、いつの間にか勉強机に身を放り投げていた。?り付くように勉強を開始したのである。
因数分解。
山月記の読解。
古文。
ヘプライ語だとか、世界史。
その他諸々。
誤って鼻呼吸をするまで私は勉強を続けた。
そして夢でやった行動と同じように、悪臭によって気絶した後、朝日が昇りあがるとともに目を覚ました。
朝日は真っ赤に燃え滾っていたが、それは私にとっての悪い未来を予期しているような気分がした。
かなり不愉快な気分のまま朝食を適当にいただき、ウーパールー

パーのことなど考えないようにしながら、学校へと向かった。
その時私は、兄がセロハンテープに姿を変えていることになど、まるで気がついてはいなかった。

学校で和気藹々と楽しく過ごしている人々に混じりながら、私はめっきり不安に襲われていて目を右往左往、キョロキョロとさせていた。教室の中で久国に話しかけられても彼の言っている言葉など右耳から左耳へと通り抜けていた。久国はそのことに気がついているようだったが特に何も言っては来なかった。久国は久国で、話せればそれで良いようなのだった。
全校集会ということで体育館に移動して校長の話を聞いたりしている最中に、ふと久国の背中を見ていると、口裂け少年のことが頭に浮かんだ。何だか久国と彼とが同一人物なのではないかという錯覚に陥っていたが、思考を深めれば深めるほど、それは錯覚ではなくて事実なのではないかと考えるようになった。校長の話は一切理解出来ていなかったが、そのことはひどく重要な気分がしたので、私は久国の背中を、小指でツンと軽く小突いてみた。
すると、水に弾かれるような、柔軟でなおかつ弾力のある反応が背中から返ってきたではないか。思わず息を呑み、とんでもない事実の発覚をどのように処理していいものかと頭を悩ませる。しかし全校集会の途中だから自由に動けるわけではない。
仕方が無いので、表彰式の暇な時間を見計らって、私は近くにいた厳しくない先生に断りを入れてから、体育館のトイレへと逃げ込んだ。
トイレの中はひどく静かで、遠くからの小鳥の鳴き声でさえ耳に届いてくる。格子窓から差し込まれる日差しを頭から被り込みながら、私はただ呆然としてしまっていて、近頃生じてばかりいる怪奇な現象の諸々の原因は何なのだろうかと、考える。もちろん、答えは出ない。

だが、今日、学校に来てから一度も香田を見掛けていないということには気が付いた。彼女とは別のクラスだが、大概一日に何度か見掛けるのが常だ。だが、今日は一度も見掛けていない。

「……」

夢の中で見た恐ろしい血走った眼の香田を思い出す。鉄パイプに串刺しにされていたウーパールーパーの哀れな姿を思い起こす。胸の辺りに突き刺されたような感触が残っている、違和感のある胸の辺りを何時の間にか手で触れている。

遠くからの小鳥のさえずりは、何処かへ消えていた。トイレの中は何も音が無い。

無音の中で佇む。その時間が長いこと続くと、耳が聞こえているのかという不安が生まれる。

「あ、あ、あ」

試しに声を発してみると『ああ、よかった』と安心することが出来る。そういった馬鹿げた行動を起こさないと耳が機能しているのかもあやふやな程に、便所は静寂に包まれている。

だが、それは突然訪れた。静寂が破られ、鼓膜がしびれる。

すぐに悲鳴だと気が付く。甲高い声。女生徒の声。続いて男の野太い叫びも聞こえる。

私はトイレから急いで抜け出て、その騒音が聞こえてくる方角に向かって全速力で駆け抜けた。足は昨日の疲れも残っているからしんどかったが、必死に駆けることを止めず、あっという間に全校集会が行われているはずの体育館の、その扉の前にまで到着することが出来た。

その場に立てば、もう中で異常な出来事が起こっていることは扉越しでも想像が容易に付く。

「いやだ！」だとか「やめろ！」だとか「殺される！」だとか。

そう言った叫び声を聞いた上で全校集会が平和に行われているという想像をするのは不可能で、もしかすると二度と忘れることの出来ない衝撃的な光景が内部では行われているのかもしれない、とい

う想像することの方が簡単だった。
しかし意を決して、扉を開けた。
そしてそれとほぼ同時に、耳に騒がしい叫声が次々入り込んでくる。
阿鼻叫喚。苦しんでいる声。悲しんでいる声。やつれている声。全てがネガティブな叫び。
目を疑う。だが目を擦っても、映る情景に揺らぎは訪れない。
体育館は世界の何処よりも悲惨な光景に包まれておりそれはまるで地獄と言っても違和感は無かった。様々な悲鳴が一種のＢＧＭと言っても良い程に満ち溢れ混沌している中で多くの人間たちがその姿形を変化させている。
皮膚の代わりに緑色の鱗が全身に張り付いているトカゲのような怪物は、しかし両眼でその姿をしっかりと観察すればその正体がかつての同級生であったことが判明する。饅頭と馬鹿にされていたそのぷくぷくとしたふくよかな顔面は、紛れも無く同じクラスの依木のそれだった。彼はトカゲへと身を転じたように見える。
次に現れたのは蟹だった。右側の腕は蟹のチョキのような形そのものなのだが、左側の腕はまだ人間の名残りであろうかチョキではなくパーの形で指がしっかりと五本ついている。だが恐ろしいのはその五本の指がついている腕が蟹の赤色の甲冑で構成されていることであり、元々の肌色の皮膚は欠片も残ってはいない。その蟹の足元に女子用の制服が転がっていることに気がつけばその蟹が元々女性であったことはわかるが、既に彼女は左腕を除けば蟹そのものといって差し支えが無かった。
体育館は皆が皆、一人残らずそのような異常な現象に陥っている。
自分も何かに姿を変えてしまうのだろうかと怖くなるが、不思議なことに私には特に変化もなく姿形は紛れも無く人間そのものの姿のままだっだ。
安心して一息をつきながら誰か助けられる人はいないだろうかと辺りを窺う。大概の人間はもはや人間はない何かしらへと身を転じ

ていて助けようが無いと思える状況だった。校長が立っていたところには人間サイズの大きさのホッチキスへと姿を変えて壇上に寝転がっている。

何かどうにか出来ることはわずかにでもあるのだろうか、それとも巻き込まれる前にさっさと逃げ出そうかという二択に悩む。その途中で、体育館の隅っこで丸まってガタガタ奮えている制服姿に気が付いた。後姿しか見えないから前がどのような有様になっているのかは想像も付かなかったが、後姿を見る限りには彼はまだ人間であるように見えた。

急いで駆け寄り、しかし手が届くまでの距離に近づくと用心のために慎重に忍び寄る。彼がガタガタ滑稽と言っても良い程に奮えている姿を哀れにも感じながら声を掛けた。

「人間？　それとも…」

制服の後姿は奮えていた身体の動きをピクリと止めて、そして驚愕が露骨に浮かび上がっている両眼をこちらに向けた。それは尋常ではない恐怖に包まれてはいたが、間違いなく人間の瞳そのものではあったので私は安心する。

「こんな隅っこに隠れてないでさっさと逃げようぜ」

こちらを警戒している彼に味方だと教えるために出来るだけ明るい声音で言ってみせると、彼もこちらが通常の人間であったことが嬉しかったのか、屈めていた身体を勢い良く直立させて微笑みすらも浮かべていた。

よかった、彼も一人では心細かっただろうが二人になったことで勇気が出て逃げ出す決意を深めてくれたに違いない、私も一人で逃げ出すには何だかいろいろ申し訳ない気持ちもあるからせめて一人の人物だけでも救出することが出来て感激だ。と、思っていたが、その制服姿の彼が右手を隠していることに気が付いた。

「右手、怪我とかしてんの？　別に隠すことはないって」

「いや…これは…」

その同級生はめっきり怪訝な様子であって何か不吉な匂いが立ち

込め始めた。彼は右手をひたすらに背後に回していてこちらにそれを見せない。そのまましばし見合って数分。
ウゾ、と同級生の後方で一瞬何かが蠢いたのを視界に入れたのは、彼の微笑みに多少卑屈な雰囲気が混じっていたことを感じ取ったのと同時だった。だが、私はあえて気が付かないフリをしたまま、しかしチラチラとさっきの蠢きが錯覚ではないのかどうなのかチェックを怠らない。
ウゾ、と二度目の蠢きをしっかりと目撃した。同級生の背後でそれは蠢いている。
そして私はこいつも実は…と思って後退を徐々にしていく途中で、卑屈な微笑みだった同級生はついに感情が爆発するかのように大笑いするのだった。だがその爆発は楽しそうだとか嬉しそうだとかというよりは、むしろそれは怖いだとか恐ろしいだとかいう感情が昂ぶっての爆発といった感じで、笑ってる本人はどうだか知らないが、見ている私としてはかなり見ていて気持ちが悪くなる笑い方で、しかも彼が大爆笑と共に今まで隠していた右手を私に見せびらかしてきたから気持ち悪さは倍増した。
吐き気が襲い掛かってきて私は、彼から、正確には彼の右手から、目を背けてしまった。
手の平には当然指が五本付いているわけなのだが、彼の場合その指一本一本が異常事態であり、しかもそれは見る者を不快な気持ちにさせるには十分過ぎる異常だった。
虫。這いずるタイプの虫たちが、彼の手のひらにくっ付く指の代わりに、なっていた。
人差し指が百足。中指が毛虫。薬指がミミズ。小指が蛞蝓。そして親指が、蛆虫。
全身から鳥肌なんてものではない、ただでさえ這いずる虫は見るだけでも全身がざわざわするというのにそれが人間の、しかもかつて同級生だったやつの右の手の平に装着されているという光景。目の当たりにして平常心は保てず、吐き気を手で無理矢理押さえ込み

ながら私は外に逃げようと走り出そうとするが、足が上手く動いてくれない。
彼の指たちはそれぞれ意思を持っているらしく、ウゾウゾ気持ち悪く四方八方に身をよじらせている。正直、襲われると思った。襲われて私も這いずる虫だらけにされてしまうんじゃないか、って心底恐怖していた。だが、右手が這いずる虫の同級生は、しかし大爆笑をやめないままで私に襲い掛かってくる素振りは一向見せない。ずっと、笑っている。
そのまま笑っているままだったらそれはそれで気持ち悪いけど、まあ助かる、とか思っていると同級生は何を思ったというのだろう、その虫がウゾウゾ蠢いている手で拳を作り、私がそれを止めさせる間も無い、彼はその拳を壁に勢い良く突き出したのであった。

ぐちゃ。

当然、蠢いていた虫たちは所詮虫だから壁などに叩きつけられたら潰れてしまう。実際に虫たちは潰れてしまった。だが、同時にその虫たちは同級生の五本の指でもあったわけである。本来ある五指の代わりであったはずなのだ。
痛くないのか、と思わず尋ねたくなったが、尋ねる前に彼は絶叫している。
ただでさえ阿鼻叫喚がそこら中を飛び回っている地獄だからその絶叫が特別というわけではないが、あまりにも目前の光景は痛々しかった。痛々しいなんてものではなく、目を逸らさなければすぐに吐いてしまうレベルであった。だから、私はもう、彼のことには構わず体育館から逃げ出すために足を早めていた。もう嫌な光景は見たくなかったから、誰と目を合わせることもしないまま夏空へと飛び出していった。気が動転するあまり、走っている途中、涙が止ま

らなかった。
涙を流しながら叫ぶ。
「俺は、平凡な毎日に帰りたい！」

5

体育館であのような地獄が生じたにも関わらず、昼間の街は至って平凡なのが逆に気味悪い。

そんな風に思いながらも歩道を踏みしめ街を歩く。その時、体育館で見た光景がいまだ脳裏で何度も繰り返しチラつきながらも、香田のことが気にかかっていた。

直感で、彼女と出会えばこの騒動にも光が差し込んでくるのではないか、あるいは、まったく理解出来ないあの体育館での怪奇を多少は理解出来るよう彼女に説明してもらえるのではないか、さらに言えば臭いのことだとか口裂け少年のことだとかこれまでの諸々の最悪でショックな出来事全ての説明もしてもらえるのではないか、と思っていた。

香田という人間は理解の範疇を超えている発想の持ち主だからこそ、理解の範疇を超えている出来事に対しての知識が明るいのではないかと気が付いたのだ。

大通りに出る。この大通りを前に十分ほど突き進み右折して、そこから色々曲がっていって書店近くの小道に入った所に香田の家はある。彼女が在宅なのかさえもわかりはしなかったが、しかし私はとにかく香田香田ってな具合に香田しか頼りが無い。神にすがりつく哀れな小市民である。

「あっ」

そこで立ち止まった。神にすがりつく哀れな小市民。そのワードに何かヒントが隠れているような気がしたのだ。幸いここは自宅ではないから臭いに邪魔されることもないから思索するべきか、と考え私は近くの電信柱に寄りかかり、思索を始めようと思ったが、やっぱり大通りなので人目が気になる。運転手がチラッとさりげなく不審気に一瞥してきてたり、どっかのおばちゃんがめっちゃこっちを睨み付けて来たりしているので、電信柱に寄りかかって思索をす

るのは諦めた。とぼとぼと歩きながら蒸し暑いあまりに遠くが陽炎になって揺らぐ炎天下を、平和に見える炎天下を、歩き続ける。空に、カラスの群れが飛ぶのが不吉だ、と思いながら。

太陽の手前に、黒々とした影。

小道に入ったところで彼に出くわしてしまった。先日、私をひどく脅かしてくれたあの口裂け少年である。久国に似ている黒い肌の彼が、書店近くの小道に入ったところで待ち伏せていたかのように直立しているのだった。

「うひひひひどうも」

相変わらず悪魔チックな微笑みを浮かべてくる彼から逃げたいと思いながら、空に向かって隆々と聳え立っている鉄塔を口惜しく眺める。夢の中ではまったく変化が無かった鉄くずバベルは、現実では恐ろしい程に全長を伸ばしていてここからでもよく見える。本当に塔を作ってるんだ香田は。

と私は呻きながらも、目の前のこの少年をどう扱えばよいのか計りかねている。

「僕ってさ。家庭用のビニールプールで身体が作られてるんだって」体育館で触った久国の背中の感覚と、口裂け少年の肩の感覚は同じ感覚だった。その口裂け少年は、執拗に自らの身体がビニールプールで作られていることをアピールしている。そうなると、必然的に思い浮かんでくるのは久国がビニールプールに漂っていた先日の光景で、久国と口裂少年の共通点は深まってくる。

「鉄くずバベルが昇り上がっているね」

少年は背後の鉄塔に人差し指を出し、その指を次には私に向けて、さらにその次には指で銃の形を模していた。

「ばーんっ」

とまだ裂けていない口で叫びあげてくる。思わず身体が縮み上が

ってしまった私を見て、彼は面白そうに腹を抱える。
「からかうって、楽しい」
ケタケタと喉を鳴らしながら彼はさらにもう一度「ばーんっ」とかましてくる。今度は二回目だったから全然縮み上がらなかったけど彼は屈託無く楽しそうで、はしゃいでいるようだ。
「ばーんばーんばーんばーんばーんばーん」
長いこと彼ははしゃいでいて、これがただの少年ならば構うことも無く通り過ぎるけれども彼の瞳のその深層を見れば明らかにそこに秘めている狂気というか触れがたい人ならざるもの的な恐怖が存在していて、その狂気を振り切って口裂け少年を横切る度胸などは、そんなもんあるわけがないに決まっているではないか。
鉄くずの塔は間近なのに。あそこに行けば、何かがわかるような気がするのに。香田に会えるような気がするのに。臭いの謎がわかる気がするのに。いろいろわかる気がするのに。
様々な混乱が怒りに変換されて怖気付かないための度胸になったので口を開く。
「お前は一体誰なのだか答えろ」
だが口裂け少年はちっともこっちにびびってはくれない。平然と
「ばーん」という返事。
「人間か」
「ばーん」
「鉄くずの塔に行きたいんだ俺は」
「ばーん」
「邪魔だどけよ」
「ばーん」
「このごみくず野郎！」
「ばーん」
「ばーんじゃないんだよ」
「ばーん」
「いい加減にしてくれ」

「ばーん」
「ここをどいてくれるだけでいいんだけど」
「ばーん」
「うーん」
「ばーん」
「ふーん」
「ばーん」
「どーん」
「ばーん」
「ばーん」
「ばーん」
「ばーん」
「ばーん」

何時の間にか二人で銃を撃ち合う展開になる。何回も風穴が開いていく少年の身体と俺の身体。俺は撃たれるたびに身体が空白になっていくっていう奇妙なよくわかんない感じになっていたけれど、楽しかったので彼と撃ち合いをするのを続けてた。僕と彼で撃ちあい。楽しいなあ刺激的だなあっつってちっとも飽きが来ない。僕は何時の間にか彼と同じ目線で直立していて、今まで見下ろしていたことを申し訳なかったねって謝りたい気分にも駆られたけど謝るのも癪だったから、その代わりに銃弾を撃ち合うことで交流を図る。ケンカと同じ原理だね。それに使う道具が銃口っていうことがちょっと危険だけど、僕は楽しいからまあいいや。彼も、楽しんでいるし万事解決。
「ばーん」
「ばーん」
「ばーん」
「ばーん」
「ばーん」
「ばーん」

「ばーん」
「ばーん」
「バーン」
「ばーん」
「ばーん」
「バーン」
「ばーん」
「ばーん」
「バーン」
「ばーん」
「ばーん」
「バーン」
「ばー……ん、何か格好いい言い方するばーんがいるけど？」
「ほんとだぁ」
僕と彼は乱入者に気が付いたので撃ち合いをやめた。
「バーン。……少年たち。閑静な住宅地で行う危険な撃ち合いは、楽しかったのだろうかな」
その作業服姿の勇ましい人を見て、僕はだいぶ嬉しい。待ち侘びていた人だったからだ。
香田の黒髪が、わずかに吹く風を受けて揺らめいてる。
また、太陽を背負い込んでる。

「一緒に行けるのは一人だけなんだよぉ」
黒髪をはためかしながら作業服姿で仁王立ちをしているというのは勇ましいが偉そうで色気があんまり無い。とか思いながら、僕はうーん一人しかいけないのは困ったなあとかいう現実的なことも考

えてる。
　香田に首根っこを掴まれて僕と口裂け少年は鉄くずバベルの頂上まで連れてこられた。香田は両手が空いてないのにひょいひょい身軽に鉄くずバベルを登ってしまうのはもはやかっこよかった。頂上に到着して首ねっこを放されて自由にしてもらうと、早速頂上からの眺めを堪能してみる。頂上は高いから僕の住んでる街を一望することが出来て、しかもカラスやすずめたちと同じ高さになってる。学校はどうなってるのかなと目を向けてみると、学校全体が変な黒い霧みたいなもやもやしてるのに包まれちゃってて、みんながどうなってしまったのかわからない。だけどパトカーとか救急車とかがたくさん黒い霧の周辺にたくさん集まってて、赤い点灯がたくさんキラキラしてる。黒と赤のコントラストがちょっと綺麗だったけど、みんなのことは心配だった。そうだ、みんなを助けなくてはいけない。だからこそ僕は香田に会っていろいろと話を聞こうと思っていたんだ。香田ならこの問題を解決してくれるんじゃないか、って想像したんだ。……だけど、僕は小さくなってしまった。子供になってしまった。こんな僕に香田の難しい話を理解できるのか不安だ。だけど頑張るしかないんだ、だから香田の言うことをしっかり耳を澄まして聞き取って理解して情報を引き出さなくちゃいけないんだ。それに、僕は今子供になってるけど頭脳まで完璧に子供になってるわけじゃないみたいだし。名探偵になった気分でちょっと嬉しい。って、そんなこと考えてる場合じゃない。
鉄くずバベルの頂上は思ってたより全然涼しい。
高いんだから太陽が近づいてきて余計に暑くなるのかなと予想していたけど、頂上には時々強い風が吹いてくるからどちらかというと涼しいかな。足元の鉄くずが熱を持っているから足元は汗だくで困ったものだけれど。
「どうする、少年たち。行ったら、もう戻ってこれないかもね。このウーパールーパーの入ってる水槽を二人の男女が天に掲げた時、神様は怒りを静めてくれるという話だけれど」

「俺か彼かのどちらかか。くひひ」
口裂け少年はまだはしゃいでいて楽しそうに笑う。だけど僕も楽しくなってきた。彼と僕でどちらが香田と共にウーパールーパーの水槽を神に捧げるのかということを争うのだ。勝負に勝ったほうが勝ち組で負けたほうが負け組だ！こんにゃろう、ばとるぜ！
しりとりがはじまる。
「しりとり」「りす」「すいか」「かもめ」「めだか」「からす」「すずめ」「？棒」「う…し」「信号機」「金閣寺」「神保町」「運動会」「印刷機」「きんのたま」「まりも」「森元レオ」「あ、漢字が違う！　森本レオだよ」「え」「やった、勝った」「漢字が違うってどういうことだよ」「ギャーギャー騒ぐんじゃない」
こうして僕が勝った。口裂け少年はよたよたと後ずさりして、「う、うそだあ」と叫んだ後、絶望に満ち溢れた表情に変わって鉄くずバベルから飛び降りようとした。絶望から自殺を試みようとすることになったのだ、口裂け少年は。
「だめだ！」
僕はすごい勢いで鉄くずをダッシュ。今にも落下する寸前の彼に向けて、手を差し伸べて助けようとしたが子供だから予想よりも腕が短い。これはもうダメか、間に合わないかもしれないと思ったが背後から「跳べ！」という香田の声。それを信頼した僕は跳躍して無理矢理口裂け少年の手を掴んだ。
「あぁっ！」
だが、僕だって跳んだからこのままでは落っこちてしまう。ペチャンコに潰れることを僕は一瞬、覚悟した。だが僕は香田が助けてくれるものと確信していたから、大丈夫だ、という思いのほうが強く、今にも僕の浮かび上がっている両足を香田がむんずと掴んでくれると思っていたものだが、しかしその瞬間が一向訪れず、ずっと僕は跳んだままで、すでに重力に引っ張れられ始めていて地面のコンクリに降下するのは時間の問題と焦る。さっさと香田足掴めよ、と思うがそれでも香田は足を掴んでくれない。どうしたことだ、まさか

羽目られたのか、という暗雲が頭を過ぎる。
その疑心暗鬼で人間不信に落ち込みそうになったその寸前。僕の両足は、グワンと勢い良く怪力で引っ張り上げられた。それに付して口裂け少年も宙を舞う。
「ぐあああああ」
「うわあああ」
ガツン、と鉄くずに全身を打ち付けてひどく痛くて泣きたくなった。口裂け少年は「うひひひ」とこんな時でも笑っているのか、と思って振り向いたら黒い顔を赤黒く変えてくしゃくしゃになって号泣していた。歯を折ってしまったのだろう、口から血が止め処なく流れているのが痛そうだったが慰めるわけにもいかなかったのは僕も歯がおっかけてしまって激痛だったから。
二人して歯が折れてしまったので争ってる場合じゃない。口が痛くてしりとりも出来ないし、そもそもしりとりで争うなんていう行為自体がいくら子供と言っても子供染み過ぎてる気がする。子供というよりは幼児じゃないかこれじゃもう。っていうことを激痛と共にやけに冷静に感じた僕だった。
学校のほうをふと見ると。
黒い霧はさらに濃く黒ずんでいた。パトカーと救急車の数が先程よりも増えている。
「いててうひひひいてて」
久国の泣き喚きを煩わしく思いながら。
こんな茶番劇をやっている場合ではないような気がして、罪悪感が生じた。

6

このお話の主人公と口裂け少年と香田が鉄くずバベルで茶番劇をやっていたその頃、別の場所、市営図書館の暗がりで一人の男がウーパールーパーになりたがっていた。何故、ウーパールーパーになりたいと思ってしまったのか、そのキッカケは彼自身まるで覚えていないが本物の気持ちで、隙あらば彼は自分がウーパールーパーになったような気分になって日々を過ごしていたし、ウーパールーパーのことを調査すればもっと彼らに近づけると思ってこうやって図書館に赴いて本をパラパラとめくったりしている。外に出て遊んだりするのを控えた上でこうやってウーパールーパーについて調べているのだから、かなり男は本気だった。冗談では無いのだった。家族などは「冗談では無いよ！　マジでほんとに」と怒り狂ったが彼はやはり本気なので、ちっともへこまない。へこまずウーパールーパーについて研究を重ねている。

彼の名前は吾郎という。つまり、何を隠そう主人公の親族の吾郎くんだ。

学校をサボって図書館に来ているので悪い行いだが、サボってよかったのだろう、今や学校は黒い霧に包まれてしまっているのだからサボらなかったら悲惨な目に遭っていた。

「…ふむふむ。なるほど、動物界脊索動物門両生網有尾目トラフサンショウウオ科トラフサンショウウオ属に分類される有尾類で、ウーパールーパーってのは流通名であって本当はメキシコサラマンダーとかいう格好良い名前がついてたりするのか。ふむふむ、なるほどー。共食いも行うというのはグロテスクだがウーパールーパーになるにはそれも重要であるわけだな…協調性も悪くなくてはウーパールーパーとしては認められないわけか…よし、来週から中二病的キャラクターになって協調性皆無にならなくてはならないな…うーん、ていうか、俺も流通名を考えなくちゃいけないんかなー…つま

り芸名ってことだろ？…吾郎だから……うーん、稲垣でいいかな、流通名」

吾郎はウーパールーパーについて詳しく書かれている一冊を借りることにし、あと協調性を無くして孤立してしまった時の暇つぶしのために、文庫本も何冊か借りなくてはいけないなと思いついた。吾郎は目ぼしい本をウキウキと探した。目標に向かっている彼はイキイキとしているのだった。

イキイキしているからこそ、背後から、怪しい足音が近づいていることには気が付かなかったのでは、あった。背後から忍び寄る、黒スーツの怪しげな女性…。

カツ、カツとやかましい足音は静寂の図書館には隅々まで鳴り響いている上に、雰囲気というものがどこか颯爽としていてスタイルも良い、に加えてキャリアウーマン風に黒スーツを着こなしている、なんて人物が市営図書館なんて所にいて目立たない訳がない。図書館の静寂の中で、彼女は密やかに、しかし確実に人目を惹いていたのであった。足音がうるさいという理由もある。

だが吾郎くんは己の世界に入り浸っているから、その存在がみるみる彼の背後に接近していることに気が付くことも出来ないで、ウーパールーパー本を腋に抱え込みながら文庫本を漁ることにだけ熱中している。

ただ、違和感にハッとした瞬間はあった。図書館に定期的に鳴り響いていたリズムが鳴り止んだことで図書館は本当に静かになり、吾郎の耳は耳鳴りに襲われたわけなのであるが、なぜリズムが鳴り止んだかと言えば、つまりヒールの踵の音が止まったということであり、それはつまり何を意味しているかと言えば吾郎の真後ろで…黒スーツの女性が立ち止まった、ということだった。

耳鳴りで集中力が切れた吾郎は、背後で息づく何者かの存在を察知して振り向いた。

黒スーツ姿の女性が、突っ立っている。

「……」

吾郎は正直びびってしまった。振り向いた所に突っ立っていた女性が、キャリアウーマンっぽい格好をしていて颯爽としているのに、顔つきだけが異常だったからである。死人かと思える程に蒼白な肌で血の気がまるで無く、黒目は穴が開いているかのように漆黒で光をまったく吸い込んでおらずまるで死んだ魚のよう。そんな生きてるんだか死んでるんだかもわからない人物が自分の背後に突っ立ってしかもこっちを食い入るように見ているというだけでも不気味で仕方が無いというのに、さらに不幸なことには、女性の体臭なのだろうか、恐ろしい程の悪臭が吾郎の鼻を苦しめてきたのだ。

「くっせえ！」

図書館の静寂の中で叫ぶから反響が凄まじい。自分の発したくっせえ！という声の余韻を聞き取りながら、吾郎は鼻呼吸を控え口呼吸へとすぐさま転じた。すー、はー、すーはー。普段から自宅が悪臭に見舞われているだけあって、吾郎は至極簡単に口呼吸をやってみせて悪臭を回避したが、今さっき一瞬嗅いでしまっただけなのにその臭いが自宅に漂っている悪臭と同一のそれだということをわかってしまった。目の前の女性は何故俺ん家に漂っている悪臭と同じ臭さなのだろうか、と疑問に思い、あ、まさかこの人の親族も悪臭に見舞われているからこの人自身も臭くなってしまったのだろうかとも思い、じゃあ俺もこんな感じで悪臭を撒き散らしているのだろうかとも思って吾郎は憂鬱になった。自分の洋服に鼻をうずくまらせて嗅ぐ。ちっとも臭くない。だけど他人が嗅いだら臭いのかもしれない、自分の体臭には自分で気がつけないっていうし。でも臭いは元々体臭じゃないんだから嗅げてもおかしくないけれど…あ、でももはや臭いが写りすぎて自分の体臭になってしまっているという可能性もあり得るかも…吾郎は深く考え込み過ぎてひどく落ち込んでしまった。自分で考え事をして勝手に落ち込むなど何とも馬鹿馬鹿しい話だが、吾郎は真剣であったから困ってしまった。

その落胆のせいだろうか、吾郎は腋に抱えていたウーパールーパー本を、うっかり床に落としてしまう。ドサリ、と音をたてて本の

ページが捲れるとちょうど挿絵のあるページで、メキシコサラマンダーの勇ましい姿がページ全体に横向きで写ってる。
吾郎は『やっぱ格好いいなウーパールーパー』とうっとりしていたがそんな場合ではない、さっさと本を拾って目の前の怖い姉ちゃんから逃走しよう、と思い腰を屈めて本を手に取ろうとした。
だが、それが妨げられる。
吾郎が本に手を差し出すよりも一寸素早く、青白いキャリアウーマンが死んだ魚の目のまま本を奪い取ったのである。しかも本を奪い取った時の彼女はその時だけ生気を取り戻したかのようで、鼻息が荒く、もう何と言うか力が込められていて、奪い取ったウーパールーパー本を両手でしっかりと抱きしめてしまったのだった。これは私の本ですよと強調している様子で、協調性が全く無いので吾郎はムカついた。
「返せよっ！　それ、俺が借りようとした本なんだよ！　あんたはそれがさも自分の本であるみたいに抱きかかえてるけどこれはみんなの本であってあんただけの本じゃないんだよ、この野郎！」
吾郎はウーパールーパーの本が奪われてしまったことで血の気が上がり、周りが見えなくなってぶち切れてしまい、死人のようなキャリアウーマンに勇敢にも飛び掛った。
だが死んだ魚の目の彼女も予想以上に力が強く、飛び掛ってきた男の吾郎にもなかなか屈せず、本を巡っての争いは終結をみせず、遂にはお互いが本の端っこと端っこを手にとって引っ張り合うという綱引き状態にまで進展するという非常に典型的な展開になる。ハッキリ言って注目の的であり、図書館中の人間たちが綱引きの行方を見守ることになり、本の無事を願うというよりは面白い事件の勃発の動向にわくわく興奮してる、っていう空気だった。「赤勝てー、白勝てー！」などという囃し立てなども遂には始まり、図書館はかつてない騒がしさに包まれる。
「自分勝手な野郎だなこの野郎！　負けてたまるか俺は力持ちっ」
「うるさい手離せ本は私のものだ」

「ウーパールーパーの熱意だったら俺は負けない」
「あんたの事情なんて知らんわ手離せ」
「うるせえさっさと手離せよ」
「いやだ」
「なんだと」
「あんたにウーパールーパーの何がわかるんだ！」
「お前にはわかるってのか。わからないだろ」
「うるさい馬鹿手離せ邪魔」
「ああっ！？」
「この本は大切に扱わなきゃダメなんだよね！」
「じゃあお前が手離せよこの野郎」
「あんたが離せ馬鹿」
「嫌だって言ったら？」
「ああん？」
吾郎と女性の喧嘩熱は頂点にまで達し爆発。その時に発せられた二人の二の腕の全エネルギーがいたいけなウーパールーパーの本に容赦なく降りかかり不吉なやばそうな音が…
「…や、やめてくれええ！」
はげ頭の図書館の館長、増岡さんは本を愛していた。どんな本にも限らず本であれば惜しみなくそれに愛情を注ぎ込む人物であった。そんな彼が泣きながら絶叫するが、二人は怒りで周りが見えず、無情にも増岡さんの目の前でウーパールーパーの本は…
――バリッ！
綺麗さっぱり。
真っ二つに千切れてしまった。
千切れた本が恐ろしい程の光を放つ。呆然としている吾郎と、口を半開きしている女性が光に包まれる。光はぐんぐん力強く変わり、図書館全体にやがて広がる。
光は少し時間が過ぎると、なぜか、真っ白い霧に変わった。
図書館中に霧は収まり切らず膨張し、学校が黒い霧に包まれたの

と同じように。

図書館は外郭ごと、真っ白な霧に包まれた。

7

白と黒。

両極なその二色の霧が、天に向けて煙となってもくもくと昇り上がっていて、しかし途中で黒と白で混ざり合い、灰色の入道雲、みたいなものに姿を転じている光景。図書館から突如溢れ出した白煙。あの図書館の中で、学校のように悲惨な事件が生じているのだろうか、と嫌な気持ちになってしまって僕は憂鬱。しかし落ち込んでいる場合でもない、歯もめっちゃ痛いし血が出てるけど香田の説明によれば、『ウーパールーパーの水槽を天に捧げれば』神様は怒りを静めてくれるらしく、この騒動も落ち着くというのである。

どういうことかと僕は様々尋ねて、結局僕の家の臭いの正体が何であったのかも判明した。

あれは、死体の臭いだったのだ。

それも何の死体かと言うとウーパールーパーの死体らしく、その怨念が我が親族の家々に臭いを撒き散らし、さらに僕を『物書きになりたいあるいはギター奏者』と脈絡も無く言い出す人物に変えてしまい、親戚の吾郎くんは「ウーパールーパーになりたい」と思わされてしまい、兄はセロハンテープになってしまい、学校のみんなはおかしくなって校長などは巨大なホッチキスになってしまったというのである。さらに香田の話を聞けば、水槽のウーパールーパーを早く天にお返ししなければ街の騒動はさらに深まるばかりで、おそらくこのままでは僕の親戚一同全員が何かしらの文房具や動物などに身を転じてしまうこと確実で、学校のみんなもおかしくなったままになってしまうのだという。最終的には街全体が人間ではない奇妙な姿になること間違い無しで、そのまま問題を解決しなければ地球上の人間たちは全て人ならざる者へと身を転じてしまうことになるのだという。

「そういうわけで私は鉄くずでバベルの塔を作ろうと決意したってわけ」
何故そういう結論に至ったのかは理解出来なかったが、香田は全てを理解したような賢者のごとくの双眸で蒼色の空を見上げ、太陽に指を示しているのだった。さも、神に立ち向かう勇者のような錯覚も覚えるレベルの勇ましさであったが、しかしそんな彼女も灰色の入道雲がウーパールーパーらしき影へと姿を変えることは予想出来ていなかったらしく、目を丸くしちゃった。
灰色の入道雲は雲ではなかったということである。雲はぐんぐんその体積を空で増やし、そして時間が経てば経つほど膨張は増すばかり。灰色の入道雲は僕らの鉄くずバベルと同じくらいの高度の空で、街を見下ろすかのような体勢で空に横たわる、ウーパールーパーの王者らしき姿となったのである。巨大や巨大。王者の風格。
僕は昔、子供の頃（いや今子供だけれども）に雲を見上げた時に『あれは犬っぽいなあ』だとか『あれは猫っぽいなあ』だとか『あれは虎っぽいなあ』だとか想像していたことを思い出した。それが現実に動物となって街に降臨するとは夢にも思わなかったが、巨大なウーパールーパーは空にたしかに存在していて、大きな口で今にも街を食べてしまいそうだった。
一体あのウーパールーパーは何をするつもりなんだろう、あれが事件の黒幕なのだろうか、と僕は想像を膨らませてしまい、こんな時だってのに興奮してた。
「うひひっひ」
口裂け少年も血をだらだら淀みなく口から垂れ流しながらも興奮しているらしく、卑屈な微笑みが半端ない勢いであって、楽しそうにはしゃいでいる。何か見たとこない踊りとか踊っちゃっててマジ怖い。だけど今はあのウーパールーパーを何とかするのが最優先事項だ。巨大な王者ウーパールーパーは今や口から涎を垂らしていて、口を街へ近づけているのだから！
僕は香田を見る。香田も僕を見る。口裂け少年は踊る。

鉄くずバベルの頂上には僕たちとウーパールーパーの入っている水槽。
「お返ししなければいけないのかっ」
僕が香田にそう尋ねると彼女は頷く。だから僕は歯から血がだらだらで痛かったけれども、それさえも忘れて、鉄くずバベル頂上の中心に置かれている、ウーパールーパーの水槽の目の前へと駆け寄る。香田も駆け寄っていて、そして彼女と僕は、同時に、水槽を天へと持ち上げようとした。太陽に水が煌いている中で、ウーパールーパーが目をキラキラ輝かせている。きっと、嬉しいのだ、王者ウーパールーパーの元へ帰してやれるのだ、これで…だが。
「あ」
「あーだめだ」
僕と香田の身長があまりにも違いすぎるせいで、上手く天空に水槽を掲げられないことが判明した。僕は現在子供だから、どう考えても無理だったのだ。
しかしそれで諦めたわけではなかった。香田は一人の少年へと白羽の矢を立てる。僕もそれを見て、彼女が何を意図しているのか理解。
「そうだ」
「そうか」
阿吽の呼吸と言える程の意見の一致。頷きあった後に、香田は黒髪をはためかしながら、そして太陽を背負いながら、僕らに叫ぶ。
「二人はまだ子供。だから二人で一人分。だから口裂け少年が担いで、そして君は水槽を担げばいい。元々の問題の発端は、実は、君が悪いんだからね！　君がしっかりとウーパールーパーをお返ししなければ、いけないよ」
口裂け少年は踊るのをやめる。そして相変わらずの「うひひ」という卑屈な微笑みのままに、僕へとはしゃぎながら接近してきて、ニヤッとする。
気持ち悪いというか不気味というか、って感じだったけど僕は嘆

願。
「頼むぜ。今はお互い子供の姿のままだ、久国」
勘でそう言ってみる。
口裂け少年はきょとんとした顔をした後、しかしやはり「うひひ」と笑った。そして正解だったらしく、
「名前を呼ばれたら、断るわけにもいかないぜ！」
と格好良く言い切った後に、彼はしゃがみ込んでくれた。久国が協力的なことに感謝しつつ僕も、
「助かったぜ！」
などとノリノリのまま彼に肩車をしてもらう。久国は力持ちらしく、平然と僕を担ぎ上げてみせる。僕は水槽を落としてしまわないように全神経を両腕に集中させながら、香田と同じ高さに到達することに成功した。まさしく二人で一人分だ。これで男女二人が、揃ったのだ。
何か妙に感動する。僕は何だか楽しい。おそらく、真剣な顔つきだけど香田も楽しんでる。久国も顔は見えないけど楽しんでいる気がする。
まるで物語の主役であるような行為が出来ることに酔っているのかもしれないし、あるいは単純に普段あり得ない出来事の連続がたまらなく面白いだけなのかもしれない。だけど理由なんてどうでもよかった。
ぬっと天に灰色の影。王者ウーパールーパーが僕たちの頭上で口を開く。
「うわっ、きたねえ」
「ほんとだ、きたねえ」
「けっこうきたねえ」
涎がだらだら垂れてきてて汚い。家の悪臭と同じような臭いが鼻腔を突いてきてしんどい。だけど僕はそれでも、今この時間を楽しんでいる。きっと、香田も楽しんでる。久国も楽しんでる。
口が近づき、涎の量は増加し続ける。水槽に涎が入りすぎて水が

溢れ零れ落ちる。
中に入ってるウーパールーパーまで零れ落ちてしまったらどうしようと思って焦るけれども、その寸前に、王者の口が。
僕たち三人と水槽ごと、全部を丸呑みにしてみせた。

8

お相撲さんが野球を観戦している小さい部屋に滑り込んだ。
お相撲さんは一人どころではなく十人くらいだったので部屋の密度は恐ろしいものだった。
そんな中に滑り込んだ僕の背中を、久国と香田が押し潰してきた。
「うぎゃ」
肺から空気が全部出た。
「あーいててっ、なんだここは」
「あ、っていうか私も小っこくなってる」
「あ、ほんとだ」
香田も黒髪は長いままだが子供に戻ってしまっているというわけで、三人で子供返りである。作業服姿の香田。水着一丁の久国。制服姿の僕。服は身体に合わせて子供サイズになってくれているから動きやすくて快適だ。にしても、若返ったことは嬉しいが、水槽は無くなっているし、街がどうなったのかもわからない。ただ僕たち三人の目の前にはとにかくひたすらに力士。力士だらけの部屋は和室な造りでお相撲さんとマッチングしている雰囲気だが、なぜこの部屋に滑り込んでしまったのかはちっともわからない。お相撲さんが野球を見ている理由もわからない。わからないだらけである。みんな盛り上がっていて僕たちには気が付いてくれない。テレビに熱中していて、お相撲さんたちはみんなメガホンやタンバリン等を持っていて騒ぎ立てている。酒なども飲んでいるらしく、皆、顔が赤い。タバコの煙も天井に充満している。
正直、僕の身体の十倍くらいは巨大な力士たちであるから、びびってしまって小便ちびってしまいそうで困る。震えながら香田と久国の様子を窺うと、二人もびびってしまっているらしく震えていて、ていうか久国の水着をよく見ると染みが出来てる。あ、こいつ漏らしてる、と思ったけどあえて言わないでおいてやった。僕もいつ漏

らしてもおかしくなかったからである。香田もびびっているが、さすがそこは香田である、彼女はまだ思考回路が生きているらしく、僕たち二人に小声で話しかけてくる。
「どうしよっか。怖いから逃げるよね？」
そりゃそうしたいけどなあ、と久国に不安気な視線を送ると、やっぱり彼も不安なのだろう、しみったれた顔をしてへこんでしまっている。まだ元気が残っているのは香田くらいだ。香田はきっと身も心も若々しいのだろう。僕と久国はなんだか気だるくなっていて頭が働いていないのだった。
「お相撲さんってでかいなあ」
久国はそんな呑気なことを言っている。その意見には賛同だけど僕はそれよか街とウーパールーパーがどうなったのか気になるし、ていうかこの部屋から逃げたい。だけど疲れてるから頭がちっとも働かない。はあ、香田だけが頼りだ。
つって香田に期待を向けると、さすが香田であった。
彼女は指を示している。その方向を追うと、抜け穴がそこにあった。
子供だけが通過できるような、なぜ部屋にそんな穴があるのかはわからないが、虫に喰われているかのようなギザギザした縁の穴ぼこが、相撲さんたちの向こう側に存在しているのだった。
うん、残念ながら、向こう側である。
「いや、どう考えても無理でしょう。絶対見つかって終わる」
穴ぼこに入れれば確かにここから離れることが出来そうではあったが、あの穴ぼこに入るには目の前に居座っている十人の力士たちを通り抜ける必要があった。部屋は狭く、十人の力士でいっぱいいっぱいなので、ばれないで力士たちを潜り抜けるのは明らかに難しいことがわかる。久国も無理だと感じたらしく、「うひひむり」と断言して首を横に何度も振った。
だが香田はそれでも目が輝いていて、希望をまるで失っていないことが見てわかる。何なんだ、どういう策があるんだ、香田、なん

でお前はそんなに半端ないんだ、と僕は羨望とあと妬みらしき感情の入り混じる複雑な思いで彼女を見る。彼女は、輝いていた。そして、力こぶを作ってみせるのだった。何、どういう意味、と思っていると、彼女は小さく、しかしはっきりと、

「あんたらを投げる。…筋肉がすごいから楽勝に出来てしまうことでしょう」

と言った。あまりに突然だったのと、意味不明だということと、二つの理由が組み合わさって、どう反応したらよいのかわからない。戸惑っているのだろう、久国がこっちを見たので、僕も久国を見た。僕と久国はしばらく見合った。お見合いしてる場合じゃねえ。

二人同時に、香田に向けて、一言だけいってやることができた。

「「何いってんの？」」

明らかに馬鹿にした言い方をしてやったのに、しかし、香田は楽しそうに笑うのだった。

大丈夫

何故そんなにも自分の意見を信用できるのか、僕には理解出来ない。それはまさしく、断言だった。「大丈夫」二度目のその言葉にも、彼女自身が昔から持ち合わせている自信が含まれていた。僕にはどうにも理解出来ない、否定したくなるような、自信。

僕はその時気が付いた。僕は、その香田の自信に満ち溢れている性格が、憎い。もしくは、妬ましい。そうなのだ。男である僕が本来持ち合わせるべきである、いわゆる男らしさや才能というものを、彼女は幼いころから持っていた。そして大きくなればなるほど僕との能力の『差』を形に表し、どうしようもない溝を掘り続けてくれている。彼女は自分で製作した船でどんどん大海を渡って行ってしまうのに、僕は、僕は、いや、俺は、ずっと、同じ場所にいる。そ

うだ、俺は、私は。
私は彼女の『自信』が羨ましかったのだ。だから、追いかけようとした。正体を、掴み取ろうとしていた。
だけどやはり私には彼女の『自信』の根本を掴みとることなど、無理なのだ。彼女はもう船で新大陸を見つけてしまう程に、遠くへと旅立ってしまっているのだ。私なんて、彼女の視界から見ればきっと小さい米粒なんだ。もしくは、蟻んこなんだ。

大丈夫

その言葉だけが耳に何度も繰り返される。
ぼーっとしているうちに久国は、香田に穴ぼこまで放り投げられた。野球選手のストレートのように勢いよく、久国は一瞬で穴ぼこへと吸い込まれていくように、飛び出して消えていった。
それによって、香田と私の存在に、力士たちが気が付く。彼ら十人は、一斉に私たちの方へと顔を向けるのだった。なぜか恐ろしい形相をしているのが、ひどく怖い。
「なんだお前ら」
「なんか用か」
「せっかく熱中していたところを」
「名前は？」
「出てけ」
彼らが口々に、怒ったようにしながら、言葉を連ねる。男らしい勇ましい声。自信に満ち溢れた。
自信には自信を、ということなのだろうか。
香田は淀みない声音で、力士たちの言葉に答えてみせる。
「おじゃましてます。野球が好きなので、投球の練習をしているんです」

私は思わず苦笑するしかない。普通に、言葉を話しやがるのは、度胸あり過ぎでおかしいだろ。
彼女の自信を再び見せ付けられた。そのことで嫌な気持ちになっている内に、彼女は僕の首根っこを掴む。
そして、鉄くずバベルの塔を登る時と同じように、軽々と。
私をストレートで、何の容赦も躊躇も無しに、放り投げてみせるのだった。
こうして私の視界は穴ぼこに突進し、見える景色は全て、真っ暗に。
香田はどうやって逃げるのだろう、なんて、その時はまったく、考えることすらもしなかった。
悔やんだって、仕方が無いのだが。

二十年の時。

9

今にして思えば、という言葉を使うことが多くなったのは、大人になるにつれてだ。

それは当然の話で、生きれば生きる程悔やむことはたくさん出てくるのだから今にして思えばという言い訳くらいさせてもらわないと、やりきれない思いばかりが募ってしまって生きていけない。

情けない限りで、私は今やもう学生時代も終えているし社会人としてだって落伍している気がする。あの複雑怪奇が連続した事件から、もう二十年近くの時が過ぎている。

私は最近、昔のことばかり思い出す『今を生きれない』人間になっていて、どこか現実をしっかりと歩んでいる気分が毎日毎日しないし、そしてどうしたら『今を生きれる』人間になれるのか、という方法すらもとうの昔に忘れてしまった気がする。

私は今、毎日を実に殺伐と生きている。仕事はあるし給料もある程度あって、結婚だってすることが出来た。そう、経済的な余裕を持っているし、それなりに普通に生き延びることも出来ている。少なくとも飯を食うのに困ることは無いのだから、きっと、人間的には私は及第点をもらってもいいと思う。それだけの努力は、毎日かかさず行ってきた。

だからこそ。これまで努力して生きてきたという自覚があるからこそ、今の、どこか地に足がついていないような空虚な毎日が悲しかった。空しかった。こんなことはあまり大声で言えることでもないから、仕方が無いので時々、自動販売機に愚痴をこぼしていたりする。何も答えてくれないことが嬉しかったりするのだ。下手に言い返してくる他人よりは、よっぽど気持ちよく愚痴れる存在なのが、自動販売機。むなしいにも程があるということは、そりゃそうだ。

故郷にはしばらく帰っていない。私は都会に現在住んでいて、故郷にはしばらく帰っていないのだ。

めっきり暑い夏空。仕事途中の、昼休み。

私は公園のベンチで缶コーヒーを啜りながら、今、久国はどうしているのだろう、とか、ウーパールーパーがまた出現したりしないかなだとか、鉄くずバベルをもう一度拝みたいな、だとか、故郷の家族や親族は元気だろうか、とか、みんな元気かな、とか。

いろいろなことを考えたりしながら、かつての『不穏な気配』の思い出に入り浸っていた。

親族の家宅が一つ残らず悪臭に満たされることから始まり、鉄くずバベルの塔を登ったり、学校であり得ない光景を目の当たりにしたり、口裂け少年が実は久国の少年時代だったり、家族や親族が文房具になったりウーパールーパーになりたいと言い出したり、空に巨大なウーパールーパーが現れたり、幼い少年時代の姿に戻っちゃったり、力士たちの部屋に飛び込んだり……。

今にして思えば…また今にして思えばと言ってしまったが…あの二十年前のひと夏は、本当に夢みたいな出来事の連続だった。大人になって何の変哲も無い毎日を送り続けていると、あの出来事が現実のものだったなんて、信じることが出来なくなる時がある。記憶力の自信は、無い。

時々思うことがある。

やはり、これも今にして思えば、なのだが。

あの複雑怪奇な事件たちは、全て『香田』が仕組んだ出来事だったのではないかと、思ってしまうことが、あるのだ。

もちろん、そんなこと普通はあり得るはずがない。学校中を混乱させたり、ウーパールーパーを空に出現させたり、私の親族家宅に悪臭を振りまいたり。そんなことは、普通は出来ない。

だけど、香田がいなくなってからの世界が平凡そのものに変わってしまったことも事実だ。あの日、香田に剛速球で投げられて彼女と別れた瞬間から、たしかに私の世界はつまらなくなった。どこま

でも平凡で、どこまでも普通。どこまでも、平和。
昔からどんなことにも自信を持てやしなかった私だが、その空想が現実なのではないかと思うことは度々ある。
香田が全ての発端だったのではないか。
馬鹿げているけど、少し自信がある。その妄信が現実だということに私は『自信』があるのだ。
本当に馬鹿げているから、自動販売機にしかそのことは話していない。彼はいつも、何も感想を言わず黙り込んだまま肯定してくれる。私のくだらない妄信を確信へと深めてくれている。
自動販売機に話しかけるってのは平凡な行いではないかもな、その行為はかなり平凡じゃないから、私にとっての一番の非凡な行為だ。非日常だ。
今にして思う。あの時、香田を置いていかなければ、私は愚痴ばかりをこぼす空しい人間などになったりなんてしなかったのではないだろうか、と。
悲観にくれている途中に、携帯電話が鳴った。電話をしてきた相手の名前を見れば『久国』だった。
なんて久しぶりなんだ懐かしい、と私は胸を高鳴らしながら、携帯電話の『通話』ボタンを押す。
そしてゆっくりと携帯電話に耳をつけると、
「おい、お前今どこにいる!?」
やけに興奮している久国の声が、やかましく飛び込んできたのだった。

「あ。お帰り」
急いで帰宅した私に、妻が軽く何か話しかけてくるが、ほとんどその内容は頭に入ってこない。黒スーツを急いで脱いで、箪笥の引き出しから私服を取り出して自分でも驚くほどのスピードで着替え

た。早着替えをこの年になってマスターしたぜ、と思いつつ「ちょっと行ってくる」などと詳細を一切伝えないまま、私は妻に手を振って、自宅を飛び出した。

夕焼けの中をひたすらに走り、すぐくたばりそうになったが諦めず懸命に走り、私は駅に驚くほどの速度で到着。自己記録を更新したぜ、という適当なことを思いながら切符を買って、電車に飛び乗った。

ガタンゴトンと揺られながら私は、普段睡魔と闘うのが基本の電車行進の中で、しかし一度たりとも眠気に襲撃されない。脳みそがハッキリと活動していて、血液が半端なく躍動しているのがわかる。眠れるわけがないし、眠るつもりもない。

夕焼けが沈んだ頃、電車はようやく私を目的地へと届けてくれた。自動扉が開くのが遅いことに苛立ちながら、私は久しぶりに故郷へと足を降ろしてみせる。

空調が効いていた電車と野外のホームの気温の差に気だるさを感じつつも、血液の躍動が止まることは無かった。

間髪を入れず、再び私は走り出す。ホームを下り、故郷の懐かしく変化が無い道をひたすらに駆け抜ける。若くない身体がいくら悲鳴を上げようとも立ち止まろうという気分にならないことに喜びを感じながら、私は目的地へと急ぐ。昔何度も足を運んだその場所へと。見上げれば、夜空を翔けている満月。そしてその手前に、たしかに黒々とした影は、存在している。

その黒々とした影は二十年前、宙に浮かんでいるだけだった。私は何度もあの影を目撃していたけれど、その正体はわからなかったし、宙に浮かんでいるだけだったのだから、あの頃は気にもしていなかった。だけど今は、あの黒々とした影の麓こそが、私の目的地である。

飛ぶようにしてあの目的地へと辿り着きたかったのだが、体力は失われていているものだから、長いこと走り続けた反動が襲い掛かり、いきなりカクンと膝が折れて地面に手と膝をついてしまった。

「もっと運動しておけばよかった」
まったくもってこれも『今にして思えば』ということなのだが、今は後悔してる場合じゃないと思えた。とにかく、目的の地へと急ぎたかった。気持ちばかりが焦るのだった。
気持ちばかりが空回りしてしまっていることに憤りも感じながら、しばらく地に伏していた。時々通りすがる車が私のことを不審者だと思っているのかと思うと悔しかったのだが、私はしかし、やはり身体がふにゃふにゃになってしまっているらしくて、膝を動かしたくても本当、動く気配をマジで見せてくれない。
悔しさに涙さえも浮かび上がりそうになる。だが泣いてたまるか日本男児、私は目的地へと赴くんだ、こんなところでへたばってたまるものか、と脳裏で叫び続けることで涙を堪えていた。
そんな時。

…うひひひひ…

私は自分でも予想外な勢いで首を動かし、俯いていた顔を持ち上げた。首をおかしくしてしまうような不吉な音が鳴ったが、しかしそれどころではなかった。卑屈な笑い声が、懐かしすぎたのだ。ゆっくりと確かめるように、唇を動かす。
「…口裂け少年」
幼い時の久国が、目の前に突っ立っていた。私はその出会いに対して感動を胸に秘めながら、しかし喜びの感情を素直に表すことも難しかったので、鼻をむずむずさせながら言葉をひたすらに選んだ。かつての香田のように、気の利いた言葉を平然と相手に伝えることは出来ないだろうかと、脳みそをフルに回転させていた。そうやって自ら率先して手探りで努力を行えば、自然と香田の元へと近づくことが出来るのだと、『自信』を持って二十年前へと近づくこ

とが出来るのだと思えた。
それはすなわち、空白だった二十年を埋め込むことと同義だとも思う。
自分でもいろいろと混乱してて、ちょっと今、訳がわからなくなっていたりもするのだけれど。
だけど夜の暗闇の中で、目の前には口裂け少年に変わっている久国。そして月の手前の黒々とした影。久々に帰ってきた故郷。
全てを取り戻せるような気がする。
私は、今夜だけ、二十年前へと再び垣間見えることが出来る気がする。
「久国。俺のことも、あの頃に戻してみてくれよ」
私は微笑んだ。すると彼も、卑屈ではあったが微笑みを返してくれた。
そして膝を折ったままへたばっている私の元に、彼は歩いてやってきてくれる。
久国は月を背負い込んでいる。地面にくたばっている私を、彼は見下ろしながら、優しい言葉を掛けてくれた。
「戻すのは簡単なことだぜ。香田に会いに行けるんだもんな。俺たちで」
口は裂けない。口裂け少年の癖に。
私は僕に変わりながら、彼に引っ張り上げられた。幼くなった僕の体は、彼の細い腕でも簡単に持ち上がった。僕も不思議なことに膝はもう全然痛くなくて、どこまでも走れるような気分だった。
久国は水着一丁。僕は制服姿で。
夜のとばりを突き抜けて。月に向かって地を蹴った。

10

久国と僕。子供二人で香田の家へ向かう。
作業服姿を見つけたい。
僕たちは夜を駆け抜けている。走っているだけなのにわくわくしていて、わくわくしているから走っている。僕たちは走れるだけ走って、はしゃいで、途中で疲れてしまったら、二十年前のように変な姿になってしまっている街の人を見て、退屈を紛らわしたりしている。道の途中で懐かしい悪臭が漂い始めて、「ああ、くせえ」「ひひくせええひひ」などと言い合って笑いながら、久しぶりに、鼻呼吸をやめて口呼吸。口呼吸をする時のコツは二十年も時が経ってるのに、ちっとも忘れていない。すー、はー、すーはー。すーはーすーはー。久しぶりにやるとあんだけ苦痛だった口呼吸でさえも楽しい。すーはーすーはー。久国が楽しそうに笑う僕を見て、不思議そうに尋ねる。
「なんか楽しそうじゃないひひひ」
「まあね」
「まあねって」
言いながら地面に転がっている文房具を一瞥する。それはハサミで、地面に刃を剥き出しで転がっているけど、その刃をよく見ればそこには人間だった名残りなのだろう、刃の先っぽが足のつま先みたいに五本の指がくっ付いている。そういう風におかしく姿が変わり始めてしまっている人間は決して一人などではなく、そこら中に、無数に、寝転がっていたり何なりしている。
「気味が悪いね」
「でもつまんなくはない！」
子供の無邪気さのままに僕たちは変ちくりんになってしまった皆を笑った。くるくる大通りを回るようにして走る。運転手が変ちくりんになってしまったせいだろう、エンジンをつけたまま停止して

いる車が一つや二つではなくたくさん。信号機も横断歩道ももはや人がいなくなってはただの芸術品だ。本当、全てが僕ら子供にとっては楽しい。面白い。
そして大通りを抜けて小道に入り、しかしそれでも走るスピードを落とさず月に向かい続けていると、僕たちは遂に近づいた。到着した。
一息をついてから、
「到着したね」
「ひひひ、うん」
「いるかな」
「いるさ」
夜闇の中で子供二人、天へ顔を上げれば、自然と口が半開きになってしまうが、そうなってしまうのも当然じゃないだろうか。
かつて二十年前、香田が居なくなると共に成長するのを止めてしまった鉄くずバベルが、隆々と、満月に向かって伸び上がっている光景。圧倒的なスケールで、僕たちを魅了する鉄の塔。正確には月に伸びているのではなく、黒々とした影へと伸びているのだろう。二十年前には気を止めることもなかった太陽や月の手前にあった影。影へと繋がる、鉄くずバベルの塔。
きっと香田は、頂上にいる。頂上まで鉄くずバベルを完成させて、あの黒々とした影へと到達しているに違いない。私たちが二十年前に気にも止めなかった場所を、彼女は見ていて、そこに到達するためのバベルの塔を一人で、作り上げていたのではないだろうか。そして鉄くずバベルが完成した今、僕たちにこれを自慢をするために、彼女は街に再び現れたのだ。僕たちを二十年前の姿に戻してくれて、希望を、見せてくれているのだ。鉄くずバベルで、人間の希望を、可能性を。
だからこそ『バベルの塔』なんだ。香田は神に挑んでいる。
怒りに触れることを覚悟で、積み上げたものを崩されることを覚悟で、彼女は人間の希望を貫こうとしているんだ。人間の発展を。人

間の可能性を。神さえも超越してしまおうと。
「うひひひ。何考えてるんだか知らないが、俺たちが考えたって答えは何も出ないぜ。香田に会わなくちゃさ」
久国の言葉にハッとしてから、たしかにその通りだ、と僕は苦笑した。
「そうだね。香田に、会わなくちゃ」
二人で頷きあい、そして暗闇の中、鉄くずへと手をかけ足もかける。顔を上げれば、果てが見えないほどに高さのある鉄塔だということが嫌でもわかる。
「登れるかなあ」僕は不安。
「どうだろうなあ、ひひ」久国も不安。
制服姿の少年の僕と、水着一丁の少年の彼。
鉄くずバベルを登り切ることにさえも『自信』が無い僕ら。
だけど確かに、鉄くずバベルには頂上があるはずだ。果てしない高さの向こう側に。
香田に会うためには、やるしかない。
だったら、行くしかないじゃないか。『自信』とかそんなの、関係ないじゃないか。
僕たちは静かな気合を入れて、どんどんと、止まることなく鉄くずを掴んでは離すということを繰り返して、地上から約、高度五十メートルくらいまで登り上がってみせる。もちろん、自分たちでもこんな所まで登れたことに驚きだ。こんなに体力があるだんて思っていなかったけど、まだまだいけるのがわかった。どこまでも登れることが僕も、そしておそらく久国もそのことをわかっている。
「まだまだ、いけるぜ」
「ひひ。おう」
ふと、もはや遥か下方にある街を見下ろせば、街のそこら中から妙な霧がかった靄があふれ出していることがわかる。二十年前に学校や図書館を包み込んだような、煙だ。そのうち、ウーパールーパーも現れるのだろうか。

「ひひ。もしかして、神が怒っているのかな。バベルの塔を作っちゃってるから」
久国がそんな冴えたようなことを言うので、そうなのかもな、と思った。街のみんなが動物や文房具に変わってしまっているのは、かつてバベルの塔の建設を神が人間の言語をバラバラにして中止させたのと同じように、今度は姿形をバラバラにすることによって建設を中止させようとしているのかもしれない。だけど、そうだとしたら、神は計算を間違えていることが僕にはわかる。
「バベルの塔を作ってるのは、一人だけなんだぜ。神様！」
僕がこれを作っているわけでもないのに、誇らしげに天に向かって叫んだ。
そうだ神は知らない。バラバラになったとしても生き延びることの出来る、人間の力強さを。香田のその未知的半端ないエネルギーを。怪力で人間を投げることも出来てしまう恐ろしい存在を神は呑気に鼻でもほじっているかもしれないが馬鹿め、今に見ていろ。まあ、僕たちは登ることしかしないけれどね。
まだまだ頂上は見えなかったが、手も足もまだまだ動く。
「どこまでもいける」
「たどり着ければ」
僕たち二人は、天へと登り上がり続けた。
どこまでも。終わりがないように。

11

このお話の主人公と久国が鉄くずバベルを登っているその同時間、一人の男が二十年振りに「ウーパールーパーになりたい」と思っていた。

何を隠そう、主人公の親族の一人、吾郎くんである。

吾郎くんはまずどうすればウーパールーパーになれるのかと考えながら、夜の街をとぼとぼと歩いていた。吾郎くんはその日仕事が休みであったのには理由があって、みんなが急に姿形を変えてしまったので仕事どころでは無かったからである。というか、休みも何も、みんなが人間をお休みしているのであった。とりあえず彼もいろいろとビビったりしたが、しかし彼の脳みその中は何時の間にか「ウーパールーパーになりたい」という思いだけである。そういうことを言い出した夕方頃から、家に懐かしい悪臭が漂い始めたので、彼は「あ、これは懐かしい」と思いながら鼻呼吸を控えて口呼吸へと転じて臭いをもろに食らわないように気を付けていた。で、「ていうか家にいるから悪臭を嗅いでしまうんだ」という当然のことを思い、夕方の街へと飛び出したわけなのである。

吾郎くんは街が自分の思っている以上に大変なことになっていることに気が付いて焦る。車道でなぜかエンジンを点けたまま停止している車の中をふと覗けば、そこには巨大なタコがいたり、巨大なウサギがいたり、巨大なシャー芯があったりなどなど、あり得ない光景ばかりが目に付いたのである。しかも夜になるころには妙な、霧らしきものが街中を漂い始め、家の中だけで嗅いでいたあの悪臭が、街のどこへ行っても臭ってくるようになってしまうではないか！吾郎くんは慌てて口呼吸をして、「いったいなにがどうなってるんだ」とパニックに陥りそうになったが、やっぱり「ウーパールーパーになりたい」という気持ちが一番大切だったので、とりあえず

どうしたらウーパールーパーになれるのかと考え、図書館へと赴いた。その途中の道で親族の一人を見かけた。息を切らしながら地面に膝をついてしまっているその親族を見て、声をかけるのはよしておこうと思った吾郎くんは、結局彼には声を掛けないまま図書館へと向かった。

そして、図書館。真っ暗で、蛍光灯も何も点いていない。明かりが皆無の、真っ暗な図書館。

だが、彼は気にせず扉を開ける。扉には鍵がかかっていなかったから、入ることが出来た。

巨大な懐中電灯が転がっていることに気がつき、それを片手で担いで、真っ暗闇の中を進んだ。

「うーん。そういえば昔もこんな風にウーパールーパーになりたいと思って、図書館に来た覚えがあるなあ。だけどその時のことはよく覚えていないな…たしか本がみつかって、それで…」

と、静寂の気味の悪い図書館の屋内を、彼は独り言を言うことで気を紛らわしながら進んだ。そして本をひたすらに探す。探すこと、一時間。その間ずっと、彼の歩く音以外、図書館はどんな音も鳴らない静寂であった。しかし。

……かつん…かつん……

吾郎くんは思わぬ突然の足音に、全身ビクっとさせて肩を強張らせてしまう。

……かつん…かつん……

どんどん足音が近づいて来ていることがわかる。ヒールの踵で鳴らすような音。吾郎くんの脳裏に、あやふやな記憶が甦りそうになる。だが思い出すか思い出せないかというあやふやなその状態、宙ぶらりんの脳みその彼、その彼に声は掛けられた。

黒スーツの青白い肌、死んだ魚のような目をしている黒スーツの女性。

吾郎くんは思い出す。二十年前の、図書館の。

「おれはウーパールーパーになりたい」

「そんな単純なものじゃないのよ」
図書館の巨大懐中電灯だけの明かりの中で。
激闘が、始まろうとしているのだった。
激闘が。

12

僕と久国は鉄くずを掴んだり離したりということを、一体どれだけ繰り返したのだろうか。手は腫れ上がってしまっているし足だって疲労のあまり震えてしまっている。

「やったな」

「うむ」

僕たちは遂に頂上へと足を踏み入れた。そこは地上で見ていた、つきの手前にあった黒々とした影。そこはまるで空中庭園といった様相の場所で、淡い青色の花がたくさん咲き誇っているのだ。それが月光を吸い込んでいるのか、花は一輪一輪全てがわずかに光を発していて、それがとても空中庭園を幻想的に見せる役割を果たしていた。僕たちはそんな花だらけの庭園の、しかし一本だけ長々と奥へと伸びている細い道を、途中休憩したりもしながら、とことこ歩いた。

見上げればまるでここは宇宙だ。星が万遍なく夜空で煌き、月が丸々とでかい。流れ星が数多く夜空を横切っているし、地上の喧騒は遥か空中のこの場所では、一切聞こえてこない。

僕たちは道をとにかく進む。長い長い一本道を、飽きることなく突き進む。子供の僕たちがどこまでも長い長い一本道を歩く。歩けば歩くほど、僕たちは気がついていなかったけれど、身長が高くなっていた。それでも僕たちはどんどん突き進む。飽きることなく、空中庭園を、歩き続ける。

歩き続けることを繰り返し、そして遂に、僕は私になった。口裂け少年とも呼ばれた男も、大人の久国へと姿を戻した。

そして、終着点へとたどり着いたのだ。道が建物を前にして、そこで終っていた。

「これは…なんだと思う？」

「そうだな…。単純に見ればお寺、って感じだけど、ここまで来て

お坊さんに出会うってのも空しいものがあるけど」
そう、それは街の至る所どこにでもありそうな簡素な外観のお寺だった。
大人に戻った私たちは、しばらく決断を遅らせてそこに立ち尽くす。だがもちろん、入るべきか入らないべきかと考えれば、当然、答えは出る。
そして、勢いをつけて、お寺の中に入り込んだ。

「あ」

思わず、素っ頓狂な声を私は出してしまう。
部屋だった。そこは、そう、お寺の外観はしていたが。
内部は、二十年前に見たような、相撲部屋だったのだ。懐かしすぎて嫌になる部屋。
ここまできたら香田に会えると思っていたのに、なんで力士の部屋に飛び込まなくてはならないのだ！
「なんだお前ら」
「何しにきた」
「邪魔だよ」
「それとも一緒にみるか、激闘」
「それなら居てもいいんだけど」
十人の力士たちが次々に、恐ろしい形相をしながら話しかけてくる。彼らは以前のようにテレビを見ているが、そこには野球の映像は映っていない。
「激闘？」久国が恐る恐るといった様子で尋ねると、一番強そうな力士が「ウーパールーパー対人間という激闘が、今面白い」と仏頂面に述べる。「一緒に見るか？　ていうか、見ないならば・・・」
力士たちが全員で一斉に力こぶを作って見せ付けてきたので、大

人の私たちは冷静に「あ、これはやばい」と悟って笑顔を作った。
「「あ、みます」」
私と久国はへこへこしながら適当に腰を下ろし、テレビで流れている『ウーパールーパー対人間』の激闘を力士たちと一緒に観覧することとなった。出演している男がどっかで見覚えのある顔だなー、とずーっと見ていたら私の親族の一員、吾郎くんだった。俳優になったとは私は知らなかった。
そんなことを思いつつ、どういう結末になるのだろうと注目する。テレビによれば、吾郎くんは「ウーパールーパーになりたい」らしく、そしてその相手の女性は実はウーパールーパーという展開だった。その女性はどうみても人間なのだが、テレビによれば、人間がでっかい建築物を作ることにウーパールーパーたちは怒っているらしく、その八つ当たりとして人間たちに嫌がらせをしているのだそうだった。悪臭を撒き散らしたり、人間を文房具や別の動物へと変えてしまったりしているのだそうだった。で、吾郎くん演じる稲垣が、嫌がらせなんて止めてくれ、と叫んだ後さらに尋ねる。
「じゃあ何で俺のところにあんたはわざわざ現れたんだ！　ていうか、悪臭は俺の親族たちに特に撒き散らされてきたが、一体全体それはどういう理由だ。お前たちがやったんか」
なかなか格好良い言い方をするな、吾郎くんは。いい俳優だ、などと呑気に眺める。力士たちも見入っているらしく、みんな目を細めている。「うぅむ」とか仏頂面の力士が唸ったりもしている。
テレビの中で、ウーパールーパーの化身である女性が、吾郎くんが演じる稲垣を嘲笑う。
「あなたたち親族は、まだ気がついていないのね」
憎憎しげに化身は稲垣に向けて叫ぶが、稲垣には何のことだか理解が出来ない。
「なにをいっているんだ？」
「あなたたちの親族の誰かの家が、我々ウーパールーパーの亡骸を辱めているということを知れ！　それに気がつかず、『ウーパール

ーパーになりたい』などと言っているあなたに私は怒り奮闘」
「亡骸を辱めているだと？」
「庭を掘れっ！」
ここで会話は終了して、あとはテレビの画面の中でアクションシーンがひたすらに流れる。が、が、が、とブルース・リーやジャッキー・チェンも真っ青になるほどの身体を張ったアクション。なかなか見応えがある。力士たちも自然と拳を握ってしまっていて、「うおお」などと仏頂面の力士は吠えてしまうくらい興奮しているではないか。
私は興奮している場合ではなくて、これが実話であることに気が付いて困った。ウーパールーパーの怒りを買ってしまい人間たちが次々と姿を変えられている原因が実は私たち親族の誰かの家がウーパールーパーの亡骸を踏み潰しているせいだったのだと言うのだから、私は正直言って皆様に謝罪したい気持ちにも駆られた。私は神様が怒ったのでみんなが姿形をバラバラにされたのだと思っていたが、とんだ勘違いだったらしい。
怒っていたのはウーパールーパーだったのだ。神様などではなかったのだった。
でもそこで疑問が生じる。ていうか、だったら結局、鉄くずバベルの塔は何で作られたのだろうかという疑問だ。私は、香田が『神への挑戦』的な意味合いで鉄くずバベルを製作したと思っていたのだが、この街で生じている異変の原因がウーパールーパーの怨念であるとするならば、そもそも神だとかどうだとかっていうのはただの私の勘違いだったわけである。神話関係の話を香田に持ち出されて、すっかりそっち関係だと思っていたのに、ウーパールーパーの怨念だったわけである。
「うーん。香田の野郎。なんだか騙されたわけではないのに騙された気分だ！こんちくしょう！」
「お、おい、どうした」
久国が落ち着けというが、私はものすごいぶち切れた表情のまま

立ち上がった。その尋常の様子でない私に、力士たちが威嚇のにらみを向けてくる。
「ああ」
「なんだ」
「なんか怒ってるのか」
力士たちの圧倒的な威圧感は以前の私だったらたじたじだったが、ぶち切れた私はちっともそれが怖くなくなってしまって、ぼかぼかと力士たちを薙ぎ倒して見せた。
「ぐわあああ」
十人の力士たちは私にやられてしまってどっかに飛んで消えていってしまった。部屋の壁とか天井を突き抜けて消えたので、部屋は崩壊寸前であったが、その中で私は穴ぼこを見つけた。縁の荒い穴ぼこには見覚えがあって、何だろうと思案すれば答えなんてあっという間である。
私はびくびくしている久国が腰を抜かしてしまっているのを見て、このままでは崩壊していく部屋に押し潰されて久国が死んでしまう、と思った。だけど久国は腰を抜かしてしまっているから自力では逃げようにも逃げられないに違いない。
「う～ん」
とか唸りながら大人の癖に小便を漏らしてて情けない。
私は穴ぼこと久国を何度も見比べて、そして、自分に香田並みの怪力があるのだろうか、と不安になったりもした。そんなことを考えている間にも部屋は崩壊している。速くしなければ私も久国も二人まとめて圧死である。それは困る。
だが、私には、二十年前の香田ほどの自信が無い。香田の瞳は輝いていたが、私の瞳はまるで光が灯ってない死んだ魚の目状態である。
「ち、ちくしょう、だめだあ」
情けない声を久国があげる。久国、そんな情けない声を出さないでくれ。私まで情けなくなってくる、とか思うと余計気持ちが暗く

なってやり切れないほどに自信が無くなる。部屋が崩壊していく。
もうだめか、と私も久国も思って絶望してやりきれなかった。だが、なんということであろうか、その瞬間である。

大丈夫

この声は、と言った感じであった。不思議なほどに自信に満ち溢れたその声。二十年前に失われてしまったはずのその声。そう、それは間違いなく、鉄くずバベルを作った、あの作業服姿の女性の声そのものであった。
私も久国もキョロキョロと辺りを見回したが、しかし姿は無い。
一体全体が何がどうなっているんだ、と思っているともう一回その「大丈夫」という自信に満ち溢れた声が聞こえたのであって、正直言ってむかついた。大丈夫もなにも、今や部屋は崩壊寸前なのであり死亡寸前五秒前なのだから大丈夫な状況ではない。それなのに香田は相変わらずの自信で「大丈夫」などと言っているわけだが、だったら姿をさっさと見せて欲しい。ここまで、鉄くずバベルを私たちは登り切って見せたのに姿も見せず、危機的なこの状況でどっかから「大丈夫」なんて言われてもあんまり説得力が無い。困る。
「大丈夫じゃない！」
そう私が叫んだその瞬間に、頭に激しい衝撃。
あ、死んだ、と思いながら、私の意識は暗転しそうになった。視界がぼやける。
そのぼやけが一瞬だけ長い黒髪を映したような気がしたが、きっと幻なのだろう、私の意識は暗転してしまったのであった。

13

結局、何もかもが、解決したようで解決していないような、もやもやした気分である。

だが、私は夢でも見ていたというのだろうか、意識は暗転したけれども結局死んでいなかったし、目を覚ましたら実家だったというのだから不思議だ。

後日、自宅の庭を掘ってみるとウーパールーパーのミイラらしきものがたくさん見つかった。なぜミイラ化しているのか。そんな事情は知らないが、亡骸はミイラ化しているにも関わらずひどく臭かった。それは今まで私たちの親族が被っていた悪臭と同じ種類の臭いであった。

街は平和になり、ウーパールーパーの呪いを受けていたことを覚えている人間など一人もいないままに、社会は突き進む。何も変わらない毎日は、香田の鉄くずバベルを登ったりした私からすると退屈であったけれども、しかし愚痴っている場合ではなく、生きていくために仕事に励まなくてはならなかった。何も変わらない毎日。香田も消えたまま。鉄くずバベルも二十年前のあの日と同じように、忽然と姿を消してしまった。変わったのは、吾郎くんが稲垣という芸名で芸能界デビューをしたことくらいだ。とっても中二病的なキャラクターが、お茶の間にウケているのだそうだ。

夜空に飛び出ると、月の手前で黒々としていた空中庭園も無くなっている。満月がただただ規則的に、空を翔けまわっている。平和、平凡。そんな二文字に対するやるせなさが私にはあって不満となっているのが、煩わしい。これから先、また自動販売機に愚痴をこぼす毎日が始まるのだろうかと想像すると、溜息ばかりが流れ出てしまう。ああ、どうなるんだろう私の将来は、とかふと考え込んでしまいたくなる。気だるくなってしまう。

夜空の下を歩いた。車が普通に走る大通りを歩いた。小道に入っ

て、香田の住んでいた家の庭の前で、立ち止まった。家がかつてあったそこには、鉄くずバベルがかつてあったそこには、今はもう何も無い。ただただ空き地。草むらが茫々で、暗くて悲しくて空しい。
満月を再び見る。しばらく眺める。ずっと、そこに突っ立っている。
風が吹いた。その時。
「……あっ」
思わず辺りを見回してしまった。しかし夜のとばりが広がっているばかりで、人の気配も無ければ猫の気配も無い。風に乗って「大丈夫」なんて、たった今自信深く声を掛けてくれたその存在は、しかしどこにも見当たらなかった。
私はため息を、ついた。でもそのため息には少し、安堵の意味も込めている。

空き地の中に踏み入って、夜闇の中で密やかに揺れる雑草や、生ぬるい風の安らぎで浸っているとさっきの「大丈夫」という言葉への信憑性が、わずかながら浮かび上がってきたような。
私はしばらく空き地の中心で、座り込んだ。座り込んで、月を見ていた。
「香田は、結局あんたは、なんなんだ…」
そういう無意味な言葉ばかりを暗闇へと溶かして、心を落ち着かせていた。現実に再び対峙するために、今は香田と会えなくても安堵が欲しい。鉄くずバベルが天へ伸び上がらなくても、時間が止まって欲しい。
そう思って遂に空き地で横になってしまって、目を閉じた。
地響きが世界を揺らしたのは、それからわずか数分後のことだ。

地響きが終ってから、私は落ち着かせていた身体を持ち上げ、状況を確認しようとして辺りを見回す。

「……あ」
空中庭園。月明かりを浴びて蒼く光る、花。一本のどこまでも続く通路。
私が突っ立っている地面は鉄くず。鉄くずバベルの鉄くず。
天には無数の星空。満月。喧騒の聞こえない、静寂の空気。
通路へと目を凝らすと、月明かりに輝く、朧な黒髪のはためきが見えた。
走ってすぐのところに。追いつけるところに。

「ほら、大丈夫って」

「本当かよ」
私は鉄くずを蹴った。そして、幻想的な一本道を駆け抜けた。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n2262n/

鉄くずバベルの塔

2010年10月16日04時40分発行